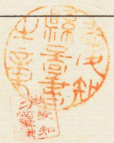




愛知眞有物品



尾張名所圖會

附録

二編



凡例

一本書は岡田文圃翁の撰述にかゝり、兼に本書が複製を公にした尾張名所園會附録初編に引續き、試書二編として、中島・春日井・美里・丹羽の四郡の事を記したものである。

一本書の草稿は、翁の後裔岡田善敏氏の許に藏せられ、書下した儘の文稿が、雜碎の片紙を以て袋の中に取められて居るのを、彼此参照して茲に順序を立てたのである。

一本書は上記の如く本より編纂の完成したものでないから、時に文章の半途で切れた所もあり、又圖外に頭註の如く載せてある所もあるが、總て著様を存して改訂を加へることを避けた。但し何々の圖と朱書してその次を空白紙とした所は、その朱書を圖外に掲げて餘白を存することを止めた。尤も初めから圖外に圖を入るべきことを撰者自ら朱書した所もあつて、これは一定して居らない。

一本書の出版は、初編複製の繼續事業であるから、總て同じ讀者の下に企畫せられたものである。

昭和八年十月

名古屋温故會

目録

小治田之眞清水卷之六

中島郡

歴代の國司

七ツ寺村

花井方村

野府城趾

一宮有合薬師

蒲生源左衛門郷成

額聽寺木堂の額

吉藤村

三社宮

善明寺池

伊東右京進宅跡

織田右馬助永政

小治田之眞清水卷之七

春日井郡

野間屋敷跡

野間藤六

淨念寺址

枇杷島

味鏡神社

天永寺

味鏡川

原大夫高春居地

瀬古讀老庵日札

白弓橋

千町田

菊安賀

天満  
天祥  
天祥  
天祥

子生和村

武藤氏故居地

北枕の怪

早足平蔵が事

櫻木氏城趾

奥谷善勝寺

御蔵堂

横野村神明社

増田右衛門の墓

長甚兵衛

福島正則の室

清の竹の話

田幡城跡狩宿城跡

平手五郎右衛門尉

丹羽越前守長秀宅跡

千秋萬歳

原田備中寺直政宅跡

高田薬師

春日井の大原

西行堂の跡

外山神社

藥師寺

松平家忠主君跡

平手政秀城跡

小牧山

小牧山碑

小牧山御陣營

小牧驛

神明社

西源寺

觀音寺

おこまが淵

覺明行者出生地

岩崎山

日根野弘就兄弟墓跡

主惠郷

小松寺

前田玄以法印

伊多波刀神社

小野朝臣道風誕生地

道風朝臣名譽の話

石山寺

勝川里

地藏寺

鳥居松休茶屋

山田次郎重忠舊居

矢田彦七之泰宅趾

矢田川原

長母寺

解脫寺

永弘院

鉈藥師

振甫山

兒島屋敷跡

川村城墟

志段味小僧

日潤聖人詠歌

玉野

目赤籠

山椒

鷹巢山

明智光秀居地跡

山猫

立石

新徳寺

小治田之眞清水巻之八

葉栗郡

山内但馬守盛豊

曾根村一本松

青木異足

伊勢田

勸五郎火

運善寺

丹羽郡

天武天皇御陵

常福寺

成澤

鳴澤

佛頭石

今枝四郎左衛門尉

虫不食菜畑

かやの木古木

繼鹿尾觀音勸進の事

大泉寺

歌仙橋

太一大見大明神社

茶臼山

盲目梶原

番場屋敷跡

傘松

坂井右近政尙

二子山古塚

井上古城

雨乙の井

古城跡

鈴木三郎重家屋敷跡

稻原寺

藥師堂

岩倉炬燵

妙見堂

今宮牛頭天王社

山内氏居住地

靈藥保童散

熱田大神宮社

傳法寺廢跡

根上りの松

外崎瓜

齒守藥師

林彌七郎故居

神明社

豆塚

鶯の池

李婦さよ

瑞仁寺

萩

龍光寺

全久寺

長福廢寺跡

柳橋那並御厨

内大臣信雄公誕生地

牛洗川

時島古城趾

日觀寺

奈良岩の跡

春日大明神社

丹波屋敷の跡

天満宮社

砂場觀音堂

森勸解由

鯽魚

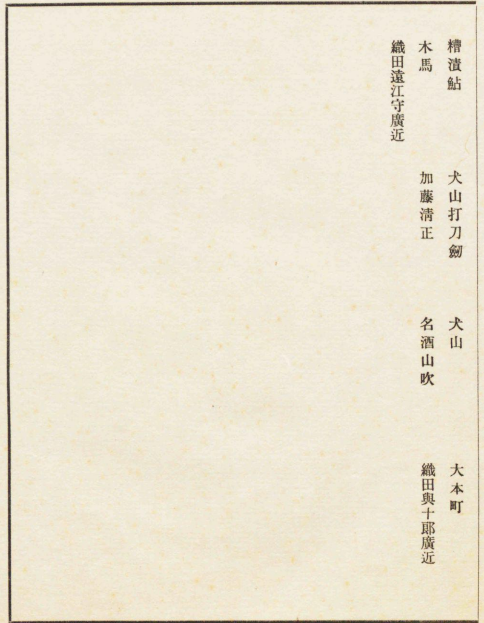
長松寺

中島氏城跡

寺澤増彦太夫屋敷跡

鶴飼町

槽渡結 大山打刀劍 大山  
木馬 加藤清正 名酒山吹  
織田遺江守廣近 織田與十郎廣近



に天守の外内  
也皇し軍官  
易のて共連  
國治を天  
方武引集

中島郡

歴代の國司

第六師を以て北仁じつ數以百部野部古△に屋せたる●以は抄録千支筆▲は多に編し編たり、國治等いは六位守  
下ノ官人々若りて ○少子部連組鉤 破日本書紀天武天皇神武天皇孫天智天皇孫天智天皇孫天智天皇孫  
有知時兼之身無事御兵自死、天道有云國土其風土其風國土其風國土其風自見死之天皇始命組鉤、 ○多治比  
真人水守 大徳貞三年七月甲午紀任。 ○大伴宿禰手拍 二五五五月下野紀任。 ○佐伯宿

福太麻呂 額從元年三月丙午紀任。 ○平群朝臣安麻呂 額從七十五上野紀任。 ○笠朝臣  
麻呂 額從元年三月丙午紀任。 ○高向朝臣人足者 額從五年十月戊子任。 ○大伴宿禰兄麻呂 下野國紀  
に萬集し編入野れり數多。 ○小治田朝臣廣千 額從五年十月戊子任。 ○百濟王全福王 十五下野國紀任。 ○高

朝臣清麻呂 額從五年十月戊子任。 ○多治比真人土作 額從五年十月戊子任。 ○高  
朝臣廣世 額從五年十月戊子任。 ○石河朝臣豐成 位嗣下野國紀任。 ○高  
朝臣廣世 額從五年十月戊子任。 ○石河朝臣豐成 位嗣下野國紀任。 ○高  
朝臣廣世 額從五年十月戊子任。 ○石河朝臣豐成 位嗣下野國紀任。 ○高

朝臣廣世 額從五年十月戊子任。 ○石河朝臣豐成 位嗣下野國紀任。 ○高  
朝臣廣世 額從五年十月戊子任。 ○石河朝臣豐成 位嗣下野國紀任。 ○高  
朝臣廣世 額從五年十月戊子任。 ○石河朝臣豐成 位嗣下野國紀任。 ○高

朝臣廣世 額從五年十月戊子任。 ○石河朝臣豐成 位嗣下野國紀任。 ○高  
朝臣廣世 額從五年十月戊子任。 ○石河朝臣豐成 位嗣下野國紀任。 ○高  
朝臣廣世 額從五年十月戊子任。 ○石河朝臣豐成 位嗣下野國紀任。 ○高

朝臣廣世 額從五年十月戊子任。 ○石河朝臣豐成 位嗣下野國紀任。 ○高  
朝臣廣世 額從五年十月戊子任。 ○石河朝臣豐成 位嗣下野國紀任。 ○高  
朝臣廣世 額從五年十月戊子任。 ○石河朝臣豐成 位嗣下野國紀任。 ○高

朝臣廣世 額從五年十月戊子任。 ○石河朝臣豐成 位嗣下野國紀任。 ○高  
朝臣廣世 額從五年十月戊子任。 ○石河朝臣豐成 位嗣下野國紀任。 ○高  
朝臣廣世 額從五年十月戊子任。 ○石河朝臣豐成 位嗣下野國紀任。 ○高

朝臣廣世 額從五年十月戊子任。 ○石河朝臣豐成 位嗣下野國紀任。 ○高  
朝臣廣世 額從五年十月戊子任。 ○石河朝臣豐成 位嗣下野國紀任。 ○高  
朝臣廣世 額從五年十月戊子任。 ○石河朝臣豐成 位嗣下野國紀任。 ○高

△津連秋主 實元五年七月四日壬寅卒。○津連秋主 正和四年壬子卒。○相模宿

麻王 五朝紀下實元五年十月庚子卒。○石川朝臣豐麻呂 龜五年三月甲辰實元。○紀朝臣本

福伊波 實元五年四月壬辰實元。○石川朝臣在麻呂 龜六年九月甲辰實元。○紀朝臣本

三日月實元七年。△中臣朝臣池守 龜元九年八月癸巳實元。○田口朝臣祖人 龜五年二月甲辰實元。

△陽侯忌寸玲瓏 外傳五世下朝紀任。○陽侯忌寸玲瓏 外傳五世下朝紀任。○紀朝臣跡麻呂

臣作真 實元五年二月庚申實元。○高賀茂朝臣諸魚 正元五年六月辛未實元。○紀朝臣跡麻呂

正三年三月乙酉實元。○井上直牛養 外傳五世下朝紀任。○文室真人子老 龜五年十月甲辰實元。

○大原真人美氣 龜五年二月丁丑實元。○息長真人淨繼 外傳五世下朝紀任。○藤原

朝臣實門 大原五世下朝紀任。○菅原朝臣清公 龜五世下朝紀任。○藤原

に七公在の朝のにも見習の事又任内朝の治見止被難なるは少りしに以て藤原朝臣本

知文のしち實に菅原朝臣菅原朝臣行色色以作之且上朝公元實天智天皇七年

入鹿 外傳五世下朝紀任。○菅原朝臣清公 龜五世下朝紀任。○藤原

に浮るの地に於て我の生息の命等分て虎の子をなれし昔少朝の家計にはよしへるは

て亦父子の取立なり思ふ可敷可。○不群臣眞常 實元五年上朝紀任。○秋篠朝

臣安よし給り給り大朝臣博正にて朝日朝臣の朝の朝の朝の朝の朝の朝の朝の朝の朝

臣田上 實元五年九月丁未任。○若江道家繼 實元五年十月乙酉實元。

○安倍朝臣犬養 實元五年九月庚辰實元。○若江道家繼 實元五年十月乙酉實元。

○滋野宿禰家譯 實元五年下朝紀任。○三原朝臣弟平 實元五年上朝紀任。

○滋野宿禰家譯 實元五年下朝紀任。○伴宿禰直臣 實元五年上朝紀任。

○小野朝臣千株 實元五年正月癸未實元。○藤原朝臣助 實元五年正月癸未實元。

△菅原朝臣峯嗣 實元五年三月庚辰實元。○常道真人兄守 實元五年正月癸未實元。

○滋野朝臣貞主 實元五年正月癸未實元。○源朝臣

○南洲朝臣年名 實元五年正月癸未實元。○高丘宿禰百興 實元五年正月癸未實元。

○藤原朝臣宗善 實元五年正月癸未實元。○藤原朝臣宗善 實元五年正月癸未實元。

○源朝臣 實元五年正月癸未實元。○源朝臣 實元五年正月癸未實元。

○源朝臣 實元五年正月癸未實元。○源朝臣 實元五年正月癸未實元。

○源朝臣 實元五年正月癸未實元。○源朝臣 實元五年正月癸未實元。

○源朝臣 實元五年正月癸未實元。○源朝臣 實元五年正月癸未實元。

○源朝臣 實元五年正月癸未實元。○源朝臣 實元五年正月癸未實元。

○源朝臣 實元五年正月癸未實元。○源朝臣 實元五年正月癸未實元。

○源朝臣 實元五年正月癸未實元。○源朝臣 實元五年正月癸未實元。

○源朝臣 實元五年正月癸未實元。○源朝臣 實元五年正月癸未實元。

○源朝臣 實元五年正月癸未實元。○源朝臣 實元五年正月癸未實元。

○源朝臣 實元五年正月癸未實元。○源朝臣 實元五年正月癸未實元。

○源朝臣 實元五年正月癸未實元。○源朝臣 實元五年正月癸未實元。

○源朝臣 實元五年正月癸未實元。○源朝臣 實元五年正月癸未實元。

○源朝臣 實元五年正月癸未實元。○源朝臣 實元五年正月癸未實元。









ふじた、ぬ先にこ田子やいそくらん千町をうけて植る早苗は

實忠

天のした恵もひろき千町田に賤か早苗はごりもつくさし

綱忠

幾千町これども盡ぬ若苗を廣きめくみこ植わたすらん

涌蓮法師

けふいとか早苗の露の玉ゆらもごる手ひまなき賤か千町田

道晃

千町田も植こそわたせ五月雨のはれま、も得ていそく早苗は

康道

千町田にむれるる田子のこる手にも猶あまりある早苗こそ見る隆豊

時しあればこ、をせにとや千町田にみごりの早苗ごりも残さぬ雅喬

熱田社法樂連歌一應九月三十日申十の旬に

仲昌  
字加賀  
宗重大國

里人の往來の安き道有て

いまかりしほになるや千町田

ご見えたり

菊安賀天満天神社熊野權現社

社内守田拜殿鳥居社一當社至て舊く木立彫

敷茂りしを近年伐盡し今は古樹の老松漸三本残る富兩社の駒犬數百歳

の星霜経て世に無類稀なる古物珍品世に名高き駒犬也天満宮の尊鉢は

二軀ありて一ツは僧形なりと云往古此地の北の方大川流れ川の洲先猿  
か河戸といふ所に熊野神社在り今御堂河原を渡りて小川の此川筋へ天満宮流れ  
寄り給ふこ也百六十七年享保七年以前社家火災有りて書記焼失す神前  
通りに松樹むらゝごあり少の池を御手洗池と云西は花井方村に近く  
並びたれども刈安賀村の内なりと蓬州舊勝録に見えたり

花井方村 むかしは福重保といひしを中むかしの頃の名に改む蓬州舊  
勝録に刈安賀村福重山尊徳寺山名も略しの寺屋敷此地にありてうしろ  
は大川の堤なり其川岸二町半ばかり數千木の櫻あり木曾川雪消春雨の  
時は花の影水面にうつれり又寺の堂前四方皆池にて蓮杜若等の花多し  
是を井水に用ひて花井とよへり其頃の歌に

花井川櫻は波に埋もれて花の上ぶく小船つりふね

其頃刈安賀の城主何某福重を改めて花井と名つけしこそ寺は其のち刈  
安賀にうつりしよししるせり

野府城趾 古城志に中島郡野府村織田九郎信治城址今爲島と見え織田系  
譜に信秀五男九郎信治尾州野府城主元龜元年九月十九日戰死于江州坂  
本とさるせり

子生和村 往昔小栗判官の室照手姫通行の節此地にて安産す夫より子生和村と云此村に今以難産の煩ひなし同村無量山慈眼寺より安産の守符を出すにあり神

武藤氏故居地 馬寄村の人彌平兵衛と稱す人物志に武藤宗右衛門中島

郡馬寄村人事信長公天正三年九月信長賜越前國敦賀郡と見え織田真紀

に天正七年己卯七月三日武藤宗右衛門病死于伊丹軍と見る織田家譜

に天正七年越前敦賀城主武藤彌平兵衛死於攝州軍中信長憐惜之賜遺跡

於其子助十郎とあり又掃部助雄政は人物志に武藤掃部助雄政中島郡馬

寄村人初事織田信雄後奉仕東照大神君と見えたり紙訂すへし

一宮有合薬師 一宮須賀崎山光徳寺本尊有合薬師弘法大住古村を廻りし川

筋あり今は水涸れ織の小川となり其形のこりて古川といふ亂世の頃篋

をそきし故旗川といひしとそ此川に流水ありしを取掲弘法大師薬師

佛を剝給ふ其木有合なりし故かく名づくむかしは此邊に有合村といふ

もありしよししるせり

蒲生源左衛門郷成 一宮の人も人物志に蒲生源左衛門郷成中島郡一宮村

人事蒲生飛彈守氏郷と見え豊臣家譜天正十五年四月秀吉使攻岩石城氏

郷臣坂小坂坂田先業入城秀吉感之賜金錢とるせり里老の傳へに蒲生源左衛門天正中奥州へ下り蒲生飛驒守殿へ四万石にて召出されしよしへり倍臣ながら大祿名譽の眞士なり秀吉公開運神寶といふ金錢を鑄させて秘藏ありしを賜はりしは倍臣ながらも名譽の勇士なりしとそ因云太閤の時代の鑄錢數々ありて左の如し



北枕の怪 宮新田村農家居住のうちに北枕とよぶ地ありむかしより其地

に家作して住めば必怪事ありといひ傳へ今に至るまで里民怖れて住む

者なく明地荒畑となり耘耕をばここと事さへ嫌へり儲いかなる怪ぞこ

いふに往古より此地に家たて、住む時は其引徒し夜より南枕東枕ある

ひは西枕にして臥すに一睡目覺めて見ればいつのまにか北枕となりて

其變りし事を覺えず家内幾人にも皆かくの如く其怪毎夜止まざれば

いかやうなる強氣の者もおち恐れてすむ人なしと里老いひ傳へたり凡

枕返し之怪といふ事は他所にも類あれどそれは狐狸なんどの所爲にて

或は東枕を西枕とし南枕を北枕に返すのみなるを此地なるは東西南を頭にして寝る者必北頭となるがややしきなり且當村古老の説にむかし黄金千兩漆百桶地中に埋め置し者ありしよしひ傳へたれば或人戯れに評してかゝる大金漆桶など埋め置し大なる磁石など埋め置し其精の顯はれてしからしむるにやさいへりいとをかしかりけり

早足平藏が事 周遊奇談年譜西國の序りかゝる奇談十一年に尾張國中島郡高野島村に小川平藏といふ農家あり寛政元年行年九十歳也上京をなすに上下七日路也それを上下四日又五日に往來す然るに食事を五日かゝれば貳升五合一日五合一度に喰し晝夜不寐にあるき其用事を相違するなり十二三日までは右の如くす云云十日の内不寐に歩行すれば家に歸りて十日が間寐つゞける事なり奇代の事也昌東翁此平藏を眼前に見たりしよしするせり

小信中島頼顯寺本堂の額、源義重の筆とキウシヤウロクにあり又みなの川峯よりおつるもみちはもつもりて波を又やそむらん  
斯波正三位源義重の詠也

吉藤村 神江寺の寺傳に神功皇后征三韓後每州置放生池名額江本州之額

江是也故祭應神帝爲額江神寺有記山白和尚所著額江記云云とせるせり  
し張州志略に見えたり

櫻木氏城趾 中野村にあり君山先生著書に中野城在中野村櫻木與太郎居此今不知所在妙典寺藏有櫻木七郎右衛門狀疑是其族とせるせり今按するに當國の櫻木氏はみな此近隣櫻木村本貫の武士にて其地より出たる人なるべし類族甚多く織田家に屬して武功名譽のきこえあり櫻木傳七は總見院殿追善記の信忠朝臣生害の條の二條の御所へ馳加はる者一千餘騎御前にて戦死せしうちに櫻木傳七も人々々共に討死せしよししるし信雄卿從士分限帳に櫻木源太貳百七十貫の貳百七十貫の見え其外櫻木久兵衛櫻木傳市郎等をのせたり就中櫻木刑部は文武を兼たる智者にて京都五山の學僧にも交はり智計をほごこしつる事あり其一舉左の如し

尾州櫻木刑部公者予舊識也時來問老僧安否見吾門測響常嗟嘆焉或  
有邪人欲亂門風或又益民無實田產於是乎公相謀先爲和會僧衆後令  
獻納寺務是皆智及言鋒之所致也宜哉居刑部官作此謀也不亦說乎昔蘇  
秦稱說客振三寸舌合從以佩六國相迎矣我聞一比丘功德倍于百千凡夫

今也公和二門僧衆防百姓蓋都興戰國合從可併案者也他時得其報則  
豈屑六國相迎乎朝來告歸國之別賦一詩以充祖饌云

續林五編

刑部高官以正言推誠護教祖宗門鄉閭歸去可尤樂陰德積時陽報繁

永祿十二孟夏旬九

仁如

奥谷善勝寺 馬場中野村にあり淨土真宗本願寺の末派なり天仁年中良  
忍法師その故郷尾張國富田に建立して天台宗の梵刹なりしが良忍より  
六代目の住僧惠達の時境内敷地等を拜領せしごと此國は月宮村なり其寺地其のち  
數代をへて住僧聞信東山親の子也の時明應元壬子年蓮如上人の弟子となり  
今の宗に改む依て聞信を中興開山とす聞信より五代目の住持了暁天正  
年中顯如上人石山合戰大坂に至り勤仕せしかば上人殊なる恩賞を下し  
給へり信長公の家臣當寺を燒拂しかば了暁歸國し住所なく暫く奥谷  
村 小笠原氏に同居す燒亡の跡に堂宇再建も慶長の兵亂にて延引し  
了暁の子了西の時寛永十五戊寅年奥谷村より當地に引移りしよし寺傳  
にいへりもと大原山の良忍上人建立の古刹にて今に至るまで安置する  
本尊阿彌陀佛の立像は良忍の眞作にていさく古雅也良忍の傳は名所  
圖會

三社宮 戸刈村にあり境内甚廣く二社あり一社には八劍宮諏訪宮を合せ

祀り一社には八幡宮を祭れり依而三社の宮と稱す鳥居石燈籠等嚴重な  
り八劍宮は文祿年中内藤主膳といふ人の勸請のよしひ傳へたれどそ  
は誤りにて今暫く古代に鎮坐せし靈社なるべし當村のうちに御祓山と  
呼ぶ古跡ありてむかし洪水にて川堤切込み築留がたかりしかは伊勢の  
御祓を切所に納め神助を得て築立し山のゆゑかく名く今猶毎年毎祀大祓を納  
めて二月十六日例祭を修行するよし里人いへり尾張風土記に海部郡太  
占山に神號生多産神社大神宮之荒御玉也云云とある如く太祓山太占山  
なごいふ地には必靈神まします例なれば此地の三社もゆるよしある古  
社なるべけれど傳へを失ひて今は知るよしなし社僧八劍山西方寺は淨  
土宗戒保村曼陀羅寺の末寺にて文祿年中本願人内藤主膳開基朝空清元  
法師を開山とす寺傳にいへり本寺阿彌陀の像はむかし京都の大原より東遷したり  
善明寺池 寺内村本村なりにありむかしより蓮池とも善明寺池とも呼び  
て里人長島といふ寺の跡也といひ傳へたり長島は長島山妙興寺のゆゑ  
よしあるをつたへたるなるべし當村のうち往古は廣き沼池にて水潦な  
りしを追々新田にいさなみて今は木田となれり故に辰新田末新田子新

田巳新田等の名あり是則妙興寺の開山禪師工夫して沼池を埋め寺の所  
分こし利を得て善明庵ごかいへる菴をむすひ置かれし跡なりこそそは  
妙興開山圓光大照禪師行狀日本書紀二年七月十一日に大照禪師應安五年西京より妙  
興寺に歸り天祥菴に居住しのち草澤を變じて楡蕪の地こなし永く千年  
常住の爲に充しよししるせり其澤池を埋むる禪師の工夫誠に奇にして妙  
計なり其事は臥雲日伴録の寶徳四年壬申十一月十一日の條に妙興開山  
有草鞋故事昔年赴關東時間諸塗故不載于入東錄馬呂州中養于蕪柴  
妙興開山曾於去寺可三里買大洲人不知其故州中飢餓歲師勸里中兒童  
日持破草鞋捨于路傍者來則當與錢諸兒各從命持來者必如約如此者殆  
乎一歲破草鞋積如丘師於是命寺之力僕刈來获切根可盈握又命折柳枝  
來切之亦如获長然後從諸僧到彼湫凡繫乎一获以一草鞋擲散洲中柳枝  
亦然其數不知幾千百人又不知爲甚事到明年获與柳生洲中鬱々葱々爾  
來刈之爲薪也湫廣可方五百間故一年受用殆乎三百貫文之資云寺用有  
餘故州中養于蕪者亦刈之率三分一以供寺于今如此云云こしるせり善  
明寺池は則ち此埋め残りたる跡なるべし當村むかし湫澤の地にてあ  
りし證は今猶田畠の字にのこりて深田砂先平柳等と呼へり昔水濕に緣

ある地名にて殊に平柳は彼柳枝のなごりにやこいこくおもしろし  
御祓堂 奥村の堤上にあり張州志畧に伊勢田里老曰奥村在于岐蘇川堤  
下自古堤防屢潰而損亡田圃元和元年藤田民部爲縣令開墾荒野處々爲  
開田五十石三斗寄附諸大神宮禰宜出口信濃以祈請堤防堅固於皇大神  
宮故指其田稱伊勢田每歲拜受萬度御祓安置堤上俗稱御祓堂是也こし  
るせり

横野村神明社 例祭正月十四日神前にて田打祭あり禰宜一人百姓二人竹  
を押曲て所作を行ふヨコノサカサ

伊東右京進宅跡 中庄村にあり君山翁著書に伊東右京進秀近宅在中莊  
村里老傳云古昔有杉原主馬助者居之時有伊東祐五郎吉近者來自關東  
娶主馬助女其子右京進秀近領知此邑其裔微賤爲農民猶住此宅以伊東  
爲氏先祖所跨馬鞍一具猶藏于家其製甚古こ見えたり

織田右馬助永政 武家評林にのせたる織田系圖及び青栗園隨筆に彈正忠  
信定の兄右馬助敏宗の二男右馬助永政こ見えたり敏宗奥田の城主なれ  
ば永政奥田村にて出生ありし人なるべし是信長公の筋違ひこ見えたり兄弟なり信  
長記に或時堂上の人と北面の侍と事の子細有て評論有けるが在久間右

衛門尉村井長門守に決斷を請れけるに我等裁斷に及び難しとて信長卿へ伺申ければ双方の様子委細に聞召れつゝ猶衆議評定して可決と被仰出ければ兩人承り理の明らかなる人々を呼集めて各評論しけるが堂上の人の道理にそ定りける北面の侍憤り思ひて織田右馬助と云人に付て言を巧にし非をかざり種々憑む由申ければ右馬助殿いじゞ心深く暫いらゞけ頼もしけなる人なれば是非を顧るに不能信長卿へ再三此事を取持申されける信長卿常々は物あらなる御人なるが老たるを敬ふ禮義にや先歸宿し給へ追ての事たるべしとて座敷を立給ひ右馬助も披歸けり信長卿加様の辭事を重て聞きし事も予か不明にこそ依れとて政道の正からさらむ事を歎き思召れるか順理則稔なり從欲惟危しと云ふ事を思召出されて

錢くつわはめられけるか右馬助人畜生とこれをいふらめ

と一首の狂歌を遊して送らせ給ひければ右馬助殿其後より次第に御前うとく成りけるが深く此轡の事をかみしめ思ひ入に付て猶いざいたふ恥ければ何の故なく衰病して遂に墓なく成りにけりと見え武家評林系圖には永政天文十四年四十六歳遁世し高野に住す法名月心としるせり

増田右衛門の墓 讀老菴日札に武州野火止の金鳳山平林寺にあり右衛門

は岩槻の城中にて切腹す因て此に葬る歎としるせり

長苜兵衛 織田眞紀に永祿二年己未尾州海東郡大屋里今は中島長苜兵衛者

織田造酒允僕也與一色村左介者友善會歲終苜兵衛爲計貢稅往于清洲

左介乘夜竊入苜兵衛宅其妻執之逃去取刀鞘以爲驗而訴之左介不服吏

使把火斧於三王社前會公田使應於野而還路由社邊訝入爲群問之視察

其事命使火斧如前公受之掌上三步置之於棚曰此不足以明無曲命斬左

介左介者池田信輝僕也故吏孀於信輝使把火斧而將免之見え



春日井郡

野間屋敷跡 清須十軒町の西八神街道の北の方にあり野村入屋敷とよよべりて信長公  
 の家士野間藤六の宅跡なるべし藤六の事は太閤記の岡田助右衛門尉が  
 一傳のうちにも其頃尾州にはなしの上手は野間藤六岡田助右衛門尉といひ  
 しが各はなしの風かはりし也野間がはなしは背も腹もきる、計りにお  
 かしかりし岡田のはなしは借も風味はげにかく有べし其義理は尤左も  
 有べきやうに深うしみて云云かうばしく侍しなりと見え

野間藤六 清須居住の人なり 其の自傳事文二年新主野の信藤は物言に尾張清須の城主と頼成

時城四の藤は頼成の赤子六修業ち五人中坊の女房は平直は入交り物と物なし人のそれ梅子自の御旗は物  
 詩城四の藤は頼成の赤子六修業ち五人中坊の女房は平直は入交り物と物なし人のそれ梅子自の御旗は物  
 茶なとぞ奪いおけるに六の物なれどもいばざりて敷本家の藤六殿はは世何んすべらひひ給れはそ  
 かされて女房と見れど何れはむし申すべき是傳いお給へとせひければさあめらばばてと藤六小  
 色にさるめ産なと見ゆ買よ池に入れば水も藤六か前にとまじ藤茶けのけりば今給はせんかたつな  
 にふき藤六の事人して藤六買よ池に入れば水も藤六か前にとまじ藤茶けのけりば今給はせんかたつな  
 けるよし年又成れば是の出仕にて藤六がち如んて藤六がたおとに風め少血ちも苦し付たり下かる  
 武事物類

○假初の手貞成ともたき火にはあつるな頼て目をまはすべし 野間

福島正則の室 青栗園隨筆に清須の城主福島正則の内室は津田與右衛門の娘也しが才覺よき婦人にてつね／＼絹布の類一端を皆裁て衣服に造りし事は稀にて多くはきれ／＼を集め綴縫ひこゝのへて正則の着用に着用へければ二十万石の所帯にはあまり過たる儉約かなご頃世に誹謗しけるが關ヶ原の御合戦の時に至り諸大名軍用の乏しくてごのひ兼たる人も多かりしに清須の城内には兵具糗糧駿馬等あまる計りの貯へありて聊もきしつかへなかりごかや武家の心かけはかくありたきよししるせり

清須の竹の話 猿投山年代記（百十四頁）に文祿元年猿投山の竹三百本を根堀にして清須へごりよせ植られしご即時に神告ありて城主より其竹を不殘もごの如く販されしよししるせり借いかなる託宣かありけむ豊臣秀次公世に聞へたる大量勇威なりごいへごも神威には敵しかたくすみやかに歸へし給ひし也其頃は清須にまさ大竹のなかりしにや松平君山の著書にも清須の山王の社の後の數は織田太郎左衛門當社造營の時近江の坂本山王の神地の竹をうつして植置たりし竹林のよしいへり

淨念寺址日村の邊

もご頼朝公の創建にて

本寺白藏の聖觀世音は即ち頼朝公守佛の像なりしに觀世音院と申天台宗の大伽藍なりしが蓮如上人より取捨聖人の聖影等々住持日高今は今古屋にあり

御陣へ教如上人下向し玉ふごき住持常眞も御供申けるに上人歸路のせつ石田三成通行を妨しゆへ上人をこの寺へごもなひ奉り我親族岐阜中納言秀信卿の家士土方彌五右衛門同藤藏（正徳三年印あり）の本願寺の御影を本願寺の由惠上人つゝかなく歸京し玉はん事の計ひをたのみしかは秀信卿ついに領掌ありて殿し玉ひ大垣通行ありしよし萬治四年印刻の本願寺系譜並寺傳（大正四行は蓮如上人の御影なり）より上人は蓮如上人の御影なりしと見えたり上人ふかく感掌在して蓮如上人眞影（御影自願）上人等の數品を常眞に與へられ猶も教の字を玉ひしご

白藏觀世音裏書

西道二年 定朝 邪

枇杷島 墟尻に春日井郡枇杷島の橋長百十一間（東大橋長六十九間中島長十三元和八年開西小橋長二十九間）

癸亥村民に掃治の料を賜ける蓋し此時新橋を營し給へるか酒井文助河野庄助藤田忠左衛門永田清左衛門等立合て下小田井村の内古堤古道を以爲料地と云云橋の内東五十間はびわ島の民掃治し西六十間は下小田

井村の民掃治すこ見え

田幡城跡狩宿城跡 張州府志に田幡城田幡村にあり越智右馬允信高居住す是則尾張の林氏の祖也信高の子彌助狩宿の城に居す是則林佐渡守信勝也城跡は今の林泉寺の境内のよししるせり

河野系圖の一本に河野伊豫守通義十一年の弟對馬守通之通義三子の五代孫六郎通存の子通國の男越智右馬助通良住尾州田畑と見え又通義の子刑部大輔通久四代の孫彈正少弼通直四十年の長男四郎晴通尾州山崎村に住す父と不和合戦に及ぶ晴通の子金大夫通定住山崎邑と見えたり

平手五郎右衛門尉 志賀村出生の人也父中務太輔政秀は義勇のみならず文事を好み和歌連歌茶事等に通達し主君信秀清須の同家と中らひあしくや、もすれば合戦に及びしを政秀深く愁へて左右方能様に申なだめ和睦を取結ひうるはしく、のひしかば禮狀を清須の家老へ遣はし珍重の旨かきのべ其文の終りに袖ひちてむすひし水の氷れるをこいへる古歌を書そへ遣はしけるごぞか、る風流の父には引かへ五郎右衛門をはじめ弟監物時秀その弟甚左衛門三人とも武邊一圖の勇者なりしが五郎右衛門名馬を持って秘藏せしを信長公我に其馬をくれよと所望せら

れけるに五郎右衛門うけたまはり某は武勇を心かけ候御免候へご憚る所なくにくていに申上進らせざりし尾籠なるふるまひなれごしいてにくみ給はざりしよし信長記織田眞紀等に見えたり五郎右衛門後には中務と改名せしにや室町殿日記の平手中務丞丞の事とある條に味方原合戦の時人數一萬平手に相添給へり既に明日打立申時御暇乞仕候しければ信長公家の重代志賀の刀と云二尺一寸の打物と一の既に立られたる筈そらしご云名馬を出され是を汝にさらする也よく高名せよご仰られければ則給はりて打立けりかくて信玄の士小山田彌三郎か陣をかけやぶり二の手に有ける馬場美濃守と渡りあひ五百三百の人數入交り大に戦ひけるか中務馬より飛おり敵五人引請終に討死しければ軍散して後信玄此平手か首を信長へ送られけるに信長御涙を流し給ひて著提所へ遣はし念頃に弔ひ給ひしよししるせり

味鏡神社 味鏡村にありて今は六所権現と申す式内春日部郡ごし本國帳に從三位と録す末社數字ありて此あたりの大社なり

味鏡山護國院天永寺 同村にあり眞言宗名古屋寶生院の末寺也天永年中鳥羽天皇の勅願にて西彌上人草創すも味鏡神社の社僧なり安食柏井

の兩郷を領し七堂十二字の大伽藍なりしが累年の兵亂に衰廢したりしを天澤法印か住職の時天正九年郷民の歸依を得て再建し頗舊實に復せり天澤の事は織田眞紀に天澤者宗天台再闍藏經學徳之僧也見武田信玄於甲州信玄問何國人曰尾州清洲東味鏡呂天永寺僧也問信長行狀曰勸武事每日調馬後學弓於市川大介云云見えたり

本堂 藥師如來は行基菩薩當國遊行の時當所の鏡池より出現ありしを菩薩とてあけて草舎を構へて安置せられし靈像也くはしく文明十二年の縁起に見えたり

寺寶 大般若經の古寫本建久應安永等の年號見えたり曆應元年九月

八日足利左兵衛督直義の收むる所なり其外古劔古鏡古文書等甚多し

鏡池 龍池等の舊地今猶存す龍池の中には小島ありて辨才天の社を安置す

丹羽越前守長秀宅跡 同村にあり其父修理亮長政武藏國より當郡兒玉村に移住ありしかば彼氏兒玉黨なる故村名を兒玉と呼へり其子五郎左衛門長秀主此地にうつりて織田豊臣兩家に屬し軍功拔群なりし事は世の人よく知れり

千秋万歳 同村に在りしが近世絶て其業知多郡蔽村に移れりむかし長母寺の無住國師千秋万歳の唱歌を作りて當村の貧民に教へて世渡りの業を助けしめらるそのかみ味鏡萬歳といひしこそ又陰陽師數人當村にあり其先祖石田元太夫といふ者より由緒ある陰陽師なり

味鏡川 水源美濃土岐郡惠那郡より出つ二十餘里をへて愛智の海に入る此所に船渡しあり木曾路の官道なり

原大夫高春居地 味鏡原村下原村の邊にありて今其所定かならずむかしより春日井原といふ廣野人居なし只此邊頗ふるき村里なり高春春日郡の郡司にて當地に住し原を以稱號す吾妻鏡に高春薩摩守忠度の外男にて平氏の屬士なれども又上總介廣常か外甥なる故彼家を背き關東に忠を盡しけるよし壽永三年三月十三日の記に見えたり

原田備中守直政宅跡 大野木村にありはじめ塙九郎左衛門と稱しを天正三年十二月信長公の命により原田備中守と改む同四年四月九日攝州大阪にて戰死す位牌大野木福昌寺にあり前備州大守從五位下大玄全功禪定門天正三乙亥五月三日原田備中守直政とあり塙宗悅は當村の産醫を業とす京師に遊ふ日近江の湖水の邊にて少女を拾ひて養育す長するに

及びて利發才あり其後江戸に下りて官醫とる依て居宅を捨て福昌寺を再興し先祖瑞氏香火の地とす宗悦及び養女の位牌を安置す

方醫院治部卿法印無爲是還居士

三光 貞和六年

福昌院妙仙日壽大姉

十文 二月二日

日壽は湖水にて拾ひ得たる女也里民の説に是則湖水の龍女にて河海の水難を除かむと誓ひけるごなん今關東往來渡船の荷物に宗悦か名字をかけば漂流の難を脱るごいひ傳へしよし市橋氏善書に見えたり

高田薬師 正事記に高田村薬師あり昔他國の座頭此堂に一宿して平家をかたり淨瑠璃三段終りて世間の無常を觀じ電光石火の世の中に遠人問ご生れ後生善所をも願ふべき身の盲目なれば佛像を拜する事もならず淺ましき身也ご歎き思ひ臥たりしかば薬師佛哀み給ひあらたなる御靈夢有て此座頭目あきらかに成しは有難き事共也其時座頭三味線ご杖ごを爰に置いて歸りけるよしにて今に有りご申す別當それより御夢想を得て目薬を出す事今に傳へてかくれなしごしる也り

瀬古讀老菴日札 所出 御師 勢州山田の西世古 方百にて云 御師朝田彦太夫は吳祥

瑞人の檀家たり云云ごあり

白弓橋 沖村ご下郷村ごの堺種川に渡せる橋を云下郷村天柱寺の記録に往古田原左京大夫ごいふ人關東に下るごて通行鴛鴦雄を弓に在る云云飯國の日又雌を在る云云エンチウ寺兵火に廢し今田圃の字に鴛鴦寺ご呼ぶ地あり近世まで山田忠左衛門ごいふ農民彼白木弓及び色々の兵器をも持つたへたりしが今は何かたへか譲りてのこりなきよし張州雜誌にいへり

春日井の大原 春日井原新田をもごにして南北東西曠野なりしが味鏡原下原上原野河原松河戸原なごいへる新田を多く墾開して村里ごなれり告天子の多き野なりければ國祖君御小鷹狩をなし給へり尾關彌右衛門ごいふ御鷹匠折々供奉したりしが或時

願はくははい應すへて夏死なむ春日井原にひはりねる頃

ごよみてやがて病死しけるごぞ實にねりひばりの名所なり

西行堂の跡 同所にあり西行上人の木像ありて俳諧師なご守りしが大山川の洪水に堂も像も流失して今は古跡ごなる撰集抄山家集西行物語等に尾張に止留ありし事は見えねご志水町の西行橋小木の歌詠等彼上人の事蹟を稱する事多し熱田社にも參られ又此地に居られし事も有しな

るべし

外山神社 北外山村にあり今は六所明神社と稱す神名式に春日部郡に入り本國帳に從三位と録す

大福山藥師寺 同村にあり曹洞宗岩倉村龍潭寺の末寺也本尊を叛藥師と稱すむかし里人中より水瓶を掘出しけるに其中に在し故かく名づく梅華無盡藏に娑婆世界南瞻部州東海道尾州路春日部郡砥山郷瑠璃山藥師禪寺化緣疏並叙云云見え其文甚長し万里和尙の詩文所々に出す故よむにものうからむ事を察してこれを畧す

松平家忠主君跡 同所にありむかし織田與四郡當所の城主也しこそ天正十二年東照宮小牧山御陣營の時此地に要害を構へ主殿助家忠を置いて守らせられし也其外此邊古城或は古砦の跡多く南外山の城は堀尾孫助田樂城は長江平左衛門小松寺砦は丹羽長重豊場村青塚砦は森長可守りてみな長久手の時の陣所なり其事皆同じければこれを略す

平手政秀城跡 小木村にあり天文年中信長公丹羽郡樂田村永泉寺の開祖泰秀和尙をめして御咄しの序に忠死せし平手が城地小木村に菩提寺を建立いたさばやと思ふ也と相談ありければ泰秀うけ給り誠によき御事

也しかし某は老衰に及べり我弟子澤彦に仰合され然るべしと申上ければ公悦び給ひ政秀寺を小木村に建て澤彦を開山とし給ひよし永泉寺の傳記に見えたり

小牧山 小牧驛の西北にありもこは帆卷山又飛車山といひしこそ七八里四面の平原の地に獨立して松竹杉檜なご生ひ茂りたれば風景殊に勝れたり弘治二年信長公此山に城を築きて清須より移りて八九年住給ひし其わたましの時京都より紹巴をめして百韻の連歌を催し且新城の賀句を命せられしかば紹巴が發句に

あき戸あけのふもこは柳さくらかな

と申しを公聞給ひ新城の祝儀にはめてたき言葉もあるべきに明けるこいふは落城の言葉にて不吉也紹巴連歌赤べたなりと御氣色變じて宣ひければ紹巴面目を失ひ逃げ去りけるよし高貴の御家の秘書及び醉餘操筆等に見えたり永祿七年の九月公岐阜に移り給ひしのも廢城の如くなりたりしが天正十二年長久手の御合戦の時東照宮御本陣とし給ひ其軍御心のまゝに勝給ひしは吉例比類なき名山なれば國祖君をはじめ世々の邦君其舊地を尊ひて山下に館舎を營み小牧御殿と名づけ給へりくは

しき事は左にのする碑銘にゆづりてこれを略す

小牧山碑

文〇に勝地生所碑の本

小牧山御陣營 昇平日新録新編中興行録に於ての長湊合戦の後日秀吉公書札を小牧山の下に立てさせ一二日のうちに一戦を決せむとありける御返書を小松寺山秀吉公の陣の下にたてさせ給ひしが右返書に無禮の筋ありければ秀吉公甚憤られしよしいへる條に秀吉覽復書嚙牙赫怒曰噫惜矣哉家康之爲豈可忍乎直蹴席起云云乃策駿馬單騎而馳近臣皆大駭各相追走秀吉直至小牧陣下下馬而揭裳鼓舞曰家康噫之而徐徐焉去上聞之曰彼欲激怒我而反自怒是亦誘我師之計我豈陷彼淺計乎舍而不追と見えまた其後の條に秀吉在伏見城也嘗朝會日誇於衆曰日本於弓矢之事也凡古今敵乎秀吉者天下豈有之乎至今數處之戰我未嘗取一敗豈其不然乎衆皆唯唯唯神祖赫然而變色曰公是何言也置家康於前而何爲出若長舌也公其忘小牧之敗乎坐中皆不寒而慄怖其有變秀吉默而入上猶愠而不止衆皆與慰之曰實戲言焉耳公何深留乎心之有曰不然武夫於武事也不可戲言也縱至大事我豈聞而舍之乎而秀吉復出柔色而言他家康心乃降此事後年細川三齋見於大猷大君語之曰臣親在其座見之至今念之猶寒心矣

小牧驛

小牧村のうちにて町屋長し中山道木曾路の宿驛にて名古屋より

三里餘こ、より江戸の方禪師野宿三里餘なり人馬繼立の會所旅泊屋休茶や等多く四時參勤上下の武家方送り迎ひ此所の茶やに會して賑は敷事限りなし寛文七年より市立をゆるし給ひければ近郷の農人等集會して人立多き里なり

神明社

同驛にあり永祿年中織田信長公の創建なり祭禮三月十六日車樂

寶幢山西源寺 同驛にあり一向宗京都東本願寺の直末也當寺所藏の蓮如

上人御書は上人の直筆にて世に比類なき什寶なり奥書に文明六年三月

三日と見えたり

飛車山觀音寺

小牧山の北の麓間村にあり淨土宗名古屋西蓮寺の末寺

也もご山上にありしごぞ此地にうつりし年月じられず山上に大なる礎

石多く残り居しを慶長十五年名古屋御城石垣の料に引取り給ひて今は

わつかに残れるよし寺傳にいへるは誤にて山上廢城の石垣石を名古屋

にうつし給ひしを誤り傳へしなるべし木堂千手觀音の銅像は弘法大師

の作にて不思議の靈佛也天正年中しれ者ありて此銅像を盗み取參川國

足助里に至りしが其夜像より光りを現し怪異を示しければ里民恐れを  
なして急ぎ當村にかへし、こそ當國三十三所のうち也

おさまが淵 牛山村の南にあり正事記にはそ丸川といふ流水におさまが  
淵といふあり昔は魚鼈多く所の者漁りけるが或年の六月十六日農夫例  
の如く水く、りして魚を取りけるに其日は魚一圓になくて只小鯰一疋  
を取り得てあがり川端に投置て休み居たるに淵の底にておさまくと呼  
ぶ聲するに彼子鯰唯唯と答へて忽ち淵へ飛入りぬ其後はおさまが淵と  
名付て入る者なし雨天の夜なごには何やらむ渡り淵へ出て牛馬なごを  
此淵へ引込む事ありしこそ明暦二年丙申六月朔日此淵より龍が天上し  
て黒雲淵底より立のばり近邊の諸村大雨或は氷を降しけり小牧は雨降  
らず空晴たりしかば黒雲に乗れる龍の形を見たりし者もありしこそ此  
龍あがりてのも一兩年の内に此淵淡くなりしよししるせり

覺明行者出生地 牛山村にあり覺明行者は當村農家の子也幼年にして父  
母に離れ土器野の新川橋の邊のまづしき家にやしなはれて成長す壯年  
に及び東枇杷島清音寺法周和尚の弟子となり彼寺に偶居す義仲將軍の  
右筆にて高名ありし覺明法師が再來にや兎角木曾の地をしたはしく思

ひ何卒彼地の御嶽山の險路を開かんと志願を發し練行成就して天明  
五年大やかなる鐵棒斧鋸を携へ木の根壹<sup>ツ</sup>艸<sup>ヲ</sup>を切開き日ならずして往古  
より人跡絶たる靈山の頂上に登る事を得たりかくて山上に行法を修す  
る事しばしす終に幾程もなく山の牛腹に下り右の手に一丈許の鐵棒  
をつき左の手に金剛の鈴をもちて其所にて立往生をさげたり其行相生  
るが如く其さま越後七不思議の即身佛弘智上人と異る事なし、りし  
のも近國遠國關東邊鄙に至るまで道俗當山に參詣する事得たり御嶽講  
を結びて數千人連詣しあるひは行人修法を持して病難災難等を除くの  
靈異を顯はすむかしの神變菩薩イハレは鬼神をつかひて富士葛城等の諸  
山を先達し今の覺明行者は行法をもて御嶽の靈山を開けり古今其徳ひ  
こしき神僧也

岩崎山 岩崎村にあり山上大岩多く樹木は少し故にけはしくして風景奇  
なり慶長十五年名古屋御城御造營の時多く此山の石ををりて石垣とし  
給へり天正十二年長久手合戦の時秀吉公の命を請て稻葉伊豫守通朝伊豫守

以下同氏の人々此山上の砦を守られしよし同氏系圖に見えたり

日根野弘就兄弟砦趾 二重堀村にあり天正十二年長久手合戦の時秀吉公



犬山樂田まで出陣ありし時東照宮小牧山を御陣取給ひしかば其向ひ破  
こして此取出を築き日根野備中守弘就同彌次右衛門其外多人數を置て  
守らせらる其軍に秀吉公敗給ひ小幡より樂田へ退き給ひし時小牧山の  
軍將たち二重堀へ押寄せ攻撃んごしけるを日根野か黨さわき立て戦は  
むご色めく東照宮の御下知に秀吉二重堀へ來られは合戦すべしきなく  
は無用と仰らる秀吉公は日根野等力を盡して戦へ危からむ時後詰して  
合戦をこげむご宣ひてたかひに出給はず終に軍戦なくしてやみにけり  
後年朝鮮征伐の時肥前の名古屋にて秀吉公此時の事を仰出され何故二  
重堀をはうち給はざりしと尋給ひければ東照宮の仰に二重堀の猛士等  
ご合戦して疲し頃後詰の御出馬に逢なば必定負軍也秀吉公來り給はぬ  
うちは合戦すべからずご令しけるご仰られければ秀吉公手を打て我も  
しか思ひて出馬をゆるめし也ご仰られしご兩君の智謀の御一致感心  
し奉るべき事也

主惠郷今二村となりて上末下末といふ往古陶器をつくり出せしもごな  
る故陶の里といひそめたり和名抄に山田郡主惠ご見え神鳳抄には尾張  
國末御厨ごかけり日本後紀に弘仁六年正月丁丑五日遣瓷器生尾張國山

田郡人三人部乙麻呂等三人傳習成業准雜生聽出身ごあるは此邊の人  
にて始て瓷器を作る事を傳習せし也其のち弘仁式及び延喜民部又同式  
の踐祚大嘗祭の條等に尾張國造れる甕、缶、酒、瓶、等々を多く奉りしよしい  
へるは皆ご、より出せり瀬戸常滑等は二三百年のち藤四郎が焼始めし  
地なれば古來の磁器は此地の産ご思ふべし堀川天皇の御世當國より瓦  
器の猿頭硯を多く奉りしも、にて造りしなるべし其硯近世に残るも  
の少く南都の東大寺の什寶に一硯ありごぞ

朝野群載曰左辨官下尾張國 應早速進上猿頭硯貳拾口瓶貳拾口事

右左大臣官件硯等外記結政左右廳并陣頭用途料宜仰彼國依例令進濟

者國宜承知依宣行之寄事於左右莫忽其勤 長治元年九月廿九日  
左少史時宗

愛藤山小松寺蓮光院 小松寺村にあり眞言宗山城國上醍醐報恩院の末寺  
也承安三年小松内大臣重盛公國毎に一道場を建立して家門永久の祈願  
を修し小松寺ご名づけられしよしは美濃國加茂郡西田原村の小松寺を  
はじめ諸國の小松寺みな同儀なり光孝天皇（小松の勅願の寺院を小松  
寺さいひし例もあり又陸奥國新田郡小松寺の如き重盛公の頃よりは二

百年以前に小松寺と稱する寺も粗すくならず當寺も寺傳には天平年中行基菩薩此地の山の牛腹に草堂をいこなみ自作の觀音の像を安置したりしに或夜の夢に觀音白衣の姿となりてふだらくの岸うつ波のしるべかごこいひかけ給ひければ行基下の句をつぎて松のうらははにさきかゝる藤とつたりしが夜明て見れば山の頂に紫藤咲亂れ居たり依て山を愛藤山と名づけられしが後年重盛公再建して小松寺と名づけ給ひしこいへり諸宇靈寶等兵火に燒亡して残れるはすくなく再興せしも頗る多し三重塔の有し跡を今塔洞といふか如き廢跡も又すくなくならず

木堂 千手觀音は普相丞の御作也當國三十三觀音の一也

僧房六宇 惣持坊池之坊東泉坊寶泉坊寶藏坊梅心坊是を小松寺一山

といふ其外觀音堂十王堂等の諸宇甚多し

鎮守權現社白山社等數字あり櫻樹樹樹の古木由緒ある舊地等甚多く寺寶重盛公の肖像古畫古書等あげてつくしがたく寺領も天正十年八月十一日信雄公の寄附より相續して元和七年十二月國祖君三百石及びの地を寄附し給へり今は名古屋の七寺より兼帶支配す

前田玄以法印 正事記に德善院玄以書法印は小松寺村より出て小松寺の

求慶法印の弟子たりしによつて寺領を申請て參らせんごありしかとも求慶元來無欲清淨の僧にて寺門繁昌の儀は佛力に任かせぬとて更に貪着なかりしかはさらば佛殿修理の爲めて當村計りを寄附ありしよしいへり

伊多波刀神社 田樂村にありて今は八幡宮と稱す式内春日部郡に入り國帳には從三位の神階を記せり同帳集説に往古板の面に鳩を画きて奉りしが傳はりて神號となりし也ゆゑに國帳の異本に板鳩天神かけるよしいへり境内廣く古木生茂り並々ならぬ大社也未社も數字あり祭禮正月六日田祭同廿二日奉射等の小祀多し八月十五日神事は殊に大祭にて神輿渡御の行粧又流鎗馬興行は其壯觀近國迄ももてはやし見物の貴賤群集をなせり

小野朝臣道風誕生地 松河戸村にあり當村むかしは上條村のうちなりしにや曆應年中大宮亮良經の撰たる麒麟抄に道風者尾張國上條にして生れ給へり此人石京大夫葛絃の子息也嫡子道風次男元風三男伊風女子一人あり何も手書也其中以道風爲第一と見え同書の附録に道風寛平五年誕生村上天皇康保三年十一月卒七十一歳從四位上左頭内藏頭とせる

り日本紀略には正四位下とし十二月二十七日卒去として位階さ卒月と少したかへり位階は重き方紀略の旨に随ふべし此朝臣能書比類なきよしは禁裡諸門の額をはじめ諸社の門額及び歌合詩合の御屏風又御賀女御入内の御屏風をはじめ諸書籍雙紙までも勅命を奉りて書寫し給ひし事百を以かそふべくそは夜鶴庭調抄入木抄才葉抄等の字書及び日本紀略扶桑略記百練抄大鏡榮花物語等の實録著聞集十訓抄等數百部の古記にしろして擧る事あたはず倍そのかみ此朝臣と參議在理の卿と手跡の勝劣を論じ人々たかひに荷擔し品賞々々ありしかごもつゝまりは道風朝臣すぐれたるよし前件の古書にも見えたり左ありて佐理卿のいたく劣れるにはあらず若是をあしく評せば三鳥の神慮にも憚りあればこゝにくはしくしるさず只世人のよくもさぐり求めざる珍敷一條をこゝにあぐ天徳三年八月十六日開詩行事畧記におもしろきふしのあるを俗文に譯して左にしろすそは彼書古寫誤字多く文義通しかたくうるさければ其要のみをとりて餘は省けり八月朔日天皇の御前にて詩合の行事を定め給ひ左の頭には民部太輔源保光朝臣をはじめ名譽の人々十餘人右の頭は右兵衛督源延光朝臣以下十餘人作者菅原文時橘直幹大江維

源道義の  
撰述に  
してよ

時源順左右四人十番の題を賜りて當日清涼殿に候して各作り争ひ講師判者勝負を指揮すさて此詩合の清書は一朝の面目萬古の遺美たるのあいた當時能書の絶妙義之の再誕空頭小野道風に書しめむと左右競ひ望む左方詞を卑くし禮を篤くし消息の書を以清書を望めば右方丁寧の意を盡してこれを請ふ左右の使一時に門に到り競ふ程に左に寄らむとすれば右詞を光して怨み右に寄らむとすれば左の使頻りに悲しむ道風朝臣いかむともすべき方なく此頃家人物忌ありて昨今事を通しかたしと消息を送りて左右の使者をかへし門戸を閉て籠居せらる爰において右方の頭右兵衛督延光朝臣藏人頭伊弉朝臣左中辨文範朝臣等道風朝臣の家に推參して門を突排て家内に入り押て對面し道風朝臣を相携へ四人同車にのりて延光朝臣の枇杷の家に歸り借座上に入れ盃酌頻りに巡らし歡娛極りなく丁寧を盡されければ道風朝臣醉に乗して清書已成りぬ左方此よしを聞きまけじ心を起して事の有さまを奏問し道風朝臣先約をたかひて右方の清書を書しよしを啓しければ左方の清書をも書べきよしの繪言を下し給ひ勅使の牛車頻りに到る其宵宴飲しはく曉に及て相分る翌十六日巳時道風朝臣參内して勅命を蒙り左方の詩を書畢りぬ左

長山屋の  
書名の如  
のうらに  
こく風の  
るひ響つ  
はた

右の詩或は眞或は行垂露の文日に向ひて彌耀き秋風の體燈に映して益照れり乾坤の一物斯朝臣にありといひつべきよし記せり當時佐理朝臣能書の名世に響きて人望類ひなしといへども此道風朝臣にのみ心を寄せられしは末代までの面目といふべしされども佐理卿此時太宰府の任にて在京し給はざりしかもしりかたし延光朝臣のす速き計らひ方左方の公事訴訟して清書をかゝしめし共に道風朝臣の名譽といふべし

道風朝臣名譽の話 天徳三年八月清涼殿にて詩合御興行作者左菅原文時源順石大江維時橘直幹四人に勅して御題十事を下され其作詩を合せ開はしめ行事の人をもて勝負を定めさせられ御慰の御遊あらせられしが當月一日天子の御前にて左右の頭及び方人又行事の人々を定め給ひぬ左の頭は民部大輔源保光朝臣方人は刑部卿源爲明朝臣以下十八人右の頭は右兵衛督源延光朝臣方人は大藏卿源盛明朝臣以下十四人なりかくて十餘日が程に各詩作成就し十六日清涼殿の孫廂にて合せらる木工頭小野道風能書の絶妙なる故左右ともに作詩の清書を競望し左方は消息の書をもて禮を篤くし乞ひ望み右方は行事の人到りて丁寧の意を含みてこれを頼む道風朝臣左に寄らむとすれば右の恨みさりかたかく右によれ

は左の責めのかれかたく殆迷惑し十五日の朝道風消息を送り問家人物忌にて事を通しがたしと申遣はし堅く門戸をさして閉居ありこゝに右の頭右兵衛督延光朝臣藏人頭伊尹朝臣左中辨文範朝臣同車にて道風の家にとり強て門戸を突排きて家内に入る主人謁する事あたはざるをあなかもに手をこり相携へて四人同車にのりて延光朝臣の枇杷の家に歸りぬ道風を座上に引入れ盃酌頻りに巡らし歌娛極りなく丁寧の詞を盡し數姓のうちに清書すてに畢れり左の方此事を聞て悔しく思ひ上奏すらく道風朝臣物忌と稱しなから右方の清書をなす條實事に乖けり何卒召仰せて左方清書なさしめ給へと啓しければ則諭旨下りて御使枇杷の第に到れりしかと固く門戸を閉ちて通宵宴飲し曉更各相分の十六日巳の時道風内裏に參入し仰を蒙りて更に左方の詩を書く左右の詩或は眞或は行垂露之文向日彌耀秋風の體燈燈猶遠可謂乾坤一物在於斯人よりて後代のためにこれを記し置くよし天徳三年八月十六日聞詩行事略記に見えたり此御世文學をはしめ諸道の達人多く能書の人すくならず然るに獨道風朝臣のみを望みて左右の清書を挑み終に勅命を奉りて一人にて双方を染筆ありしは奇代の名譽也

古今書局二王家法帖問君學得壽昔日御屏揮翰處相應新樣似梅花  
 西天山石山寺妙行院瀨古村にあり天台宗野田密藏院の末寺也本堂の本  
 尊如意輪觀音の像は興正菩薩の作にて近江の石山寺觀音と同じ木なる  
 故かく名づく此地平面にして更に石山といふへき地勢にあらずひこへ  
 に此觀音によりたる寺號なり當國三十三所の一區なり

勝川里 同村の北の方庄内川の北岸にあり長久手御合戦の時東照宮此處  
 まで忍びておはしまし御行厨なごめし且御武具裝束をこゝへ給ひて  
 里の名を問ひ給ひしかば里人勝川と申上しかば殊の外悦はせ給ひ則御  
 旗竿を此地にて切せて御用ひ遊はれしがはたして御勝軍となり池田森  
 の良將を討さり給ひぬ御嘉例として御旗幟は必此地より奉れり

瑞雲山地藏寺 勝川村にあり臨濟宗木ヶ崎長母寺の末寺也文永二年勅證  
 無盡禪師の開基也無盡名周都號龜山無住國師の法嗣にて才學の名譽あ  
 り正和二年九月廿七日七十九歳にて寂す住坊の傍に柏蔭樹の大木あり  
 しを愛して無盡子

投宿閑人宅 庭清慰目前 一花紅百日 五葉綠千年

月上懐秋色 鐘鳴報曉天 心頭無別事 忘境獨安禪

此詩を見て雅趣を知るべし本堂の釋迦の像は殊勝の古佛なり

鳥居松休茶や 勝川の北にあり内津海道の茶店なり木曾路の脇道にて下  
 海道といふ西國の方より善光寺へ參詣の編素及び信濃に通ふ商人の往  
 來する私道にて常に族人たゆる事なし名古屋より中山道大井宿へ出る  
 に本海道よりは三里近く且公用の官人往來する事なければ煩はしから  
 ず閑雅なる筋道なり

山田次郎重忠舊居 山田村にあり清和天皇の御末源滿政の裔孫山田太郎  
 重滿の子にて一族廣くみな尾張源氏と稱す重忠父子一族承久之亂れに  
 官軍に屬して大將たり尾張九瀬の渡りのうち墨俣の渡りを防ぎて關東  
 の軍兵と戦ひけるが徹運にして敗軍し上京して猶軍議せしかども皇威  
 猛からず朝敵に對しかたく多く討死しければ重忠等嵯峨の奥に落行き  
 子息伊豆守以下一族自害せしよし承久軍物語承久記吾妻鏡等に見えたり  
 重忠忠魂義膽比類なしといへども其功むなしきは歎息すべきの至り  
 也

沙石集にいはく尾州に山田次郎重忠と云ふは承久之時君の御方にて打

れし人也弓箭の道人にゆるされ心もやさしくて民の煩ひを思ひ知りよ  
ろつ優なる人也けり所領の内に山寺法師ありけり八重つゝじを持たり  
けるを重忠ほしく覚えて乞<sup>ば</sup>や乞<sup>ば</sup>思ひながら我心をもつて思ふに彼も  
惜しく思ふらむ如何無<sup>情</sup>乞<sup>ば</sup>べきと思ひ返して日来過けるに或時彼僧大  
なる科ありてまごふべき事ありけるに藤兵衛尉何某云ひて檢断しけ  
る侍に仰付て此科料に七匹四丈の絹をや進らす八重郷獨をやまいら  
する云て過に行へごぞ下知しける藤藤兵衛尉行向ひてしかゝの仰  
也といへば此僧七疋四丈をこそ參らせ候はめ此つゝじをもて心をも慰  
め候へばご申けるを主の心を知りて絹を進らせては猶御不審殘る事あ  
るべし只つゝじをまいらせ給へといひければちからなくてほりて奉る  
共にやさしくこそ云云

矢田彦七之泰宅趾 矢田村にあり太平記の大塔宮熊野落の條の山伏姿に  
て供奉九人のうちに矢田彦七と見え混合之記の宮方殘黨のうちに之泰  
壘田の一族にて尾州春日郡矢田に住居のよししるせり始終南朝に仕  
へし士なり

矢田川原 名古屋の府士炮術の師家大筒石火矢地雷火等の業を試る所也

山田川原より矢田川原まで數十町の沙漠にて烽火狼煙等をも試み軍戦  
の備へをなすの良地なり

靈鷲山長母寺 矢田川原のうちの出崎にありて其地を木か崎といふ臨濟  
宗京都東福寺の末寺なり治承三年山田次郎重忠其母の菩提の爲に創建  
し觀勝法師を開山とすはじめ天台宗なりしか無住國師が住職の時今の  
宗に改む無住名は一圓號は道曉大圓國師と謚す鎌倉梶原氏の子なりし  
か父祖一時に滅亡しければ去て京都に至り聖一國師に従ひ天台の奥儀  
禪旨教外の傳を極めて道徳昭々たり光明峯寺道家公一圓をもて東福寺  
二世の住持とせむとせられしかば固く辭して弘長三年當國に來れり春  
日部郡篠木庄は梶原平次左衛門尉景高の領知なりしかば舊縁もて當國  
の繙素を教諭すかくて此長母寺の衰へたるを修補して住持し又伊勢の  
桑名郡の蓮華寺をも兼帯す四十餘年兩寺住職の間に沙石集雜談集聖財  
集妻鑑等の數部の書を著はし正和元年十月十日八十七歳にて入滅せら  
る其時の遺偈

一 瀧浮海 八十七年 風休浪靜 依舊湛然

雜談集に曰當寺に有因緣故歎相通こと四十三年無縁の寺絶煙衣鉢道具

之外無資財善夏は麥飯粥などにて命をつき侍り愚老病體萬事不快の中  
に老子の云へる禍の中の福にて麥飯粥を愛し侍る故分の果報也

述懷

さらすことも愛するよしにいひなして世を渡るへき粥と麥めし麥飯の  
むまれかゝりて好まるゝ哉たり難敷

當寺に四十餘年經廻りて因縁盡たるにや萬事心に不留事を詠

之

人は不和寺は無縁に碧なし木か崎にこそこりはてにけれ

無住當寺にて示寂今に入定の地と影堂を稱し今に地下にて存命にて在  
らるゝよし俗にいへり然るに本朝高僧傳東國高僧傳延寶傳燈錄等には  
無住伊勢の蓮華寺にて入滅のよししるせり今何れか可否を知らず近年  
認忍法師が撰みたる無住國師道跡考にくはしくしるせり合せ見るべし  
本堂影堂觀音堂庫裏寶藏寶篋印塔等諸宇山上の平地にあり鎮守五社  
大明神社熱田社等あり月見山鏡池岩井等の勝蹟は皆由緒ありといへ  
ども略之境内の諸木とも大樹には必檜木の寄生あり奇といふべし寺  
寶無住自願り當時又地ぬかひける十六石に漢く

木か崎八景

雄嶽晴雪 金鱗城朝暉 秦江麥浪 矢堤車馬 莊河春流

兒峯夕照 幸山神氣 鏡池香蓮

寶永四亥十月板行の木賀崎略縁起にあり

楞伽山解脱寺 西杉村にあり

本堂釋迦の木魚藥師堂影堂影堂の行高なる窟

本殿臨壇に成瀬華人正正虎朝臣の像及び靈牌を安置す

市橋氏著書に曰傳云此寺往昔竹葉軒といひしこかや桃青庵芭蕉の句あり

粟稗のたらぬ事なし草の庵

上野山永弘院 上野村にあり臨濟宗京都妙心寺の末寺なり本尊地藏菩薩

佛作工定 里俗此像を箭受地藏と稱し京師壬生寺の地藏と同木自作といひ傳

へたり文徳三甲午年著 此像は大旦那下方左近貞清の信仰佛なり弘治二丙

辰八月廿一日當郡稻生の合戦に眞清手紙を蒙り既に死に向はんとする

時白髮の老人自馬を引來り懷中より靈藥を取出し眞清が口中に含ませ

ければ忽ち身心朗かにして氣力當の如し彼馬に眞清を乗せて上野の城

に送り來る城中には三日以前討死と聞て今日法事供養をなす處へ歸り來りければ人々悦ぶ事限なし貞清老人の介抱に預りし事を語り家僕に命して厚く謝せんごすこゝにおいて老人忽然として行方を知らずなりぬ貞清大に驚き信々思ふに我常々地蔵菩薩愛宕權現を信ずこれ偏に地藏愛宕の感應の驗なるべしと益尊崇の志しをはげまし當寺地蔵を再興して一堂を建立し愛宕大權現を當所衆の中に鎮め祀れり其のち元龜元年六月廿九日江州姉川の合戦に夷天塚がたく軍兵各胃を脱主從とも水に浴す時に貞清が腰に白蛇來りて纏へりよくく取あけ見れば愛宕の御札地藏の御影也こゝにおいて貞清神佛擁護の奇特を感じ忽兵具を固め敵を待受力戦して高名をなししよ畧縁起及び市橋氏の著書に見えたり

振甫山鈍藥師 上野村にあり壽山振甫は明國の産なり寛永正保の頃明季崇禎の亂をさけて日本に渡り後當國に止住す瑞龍賢君寵遇し給ひ此地を山莊に賜ふ依之俗にしんぼ山と稱す子孫醫をもて業ごす代々名聲あり藥師堂に安置の本尊は僧圓空の彫刻にして臨壇に十二神將を安す此佛像甚麗作にして密ならず故に俗鈍藥師と稱す圓空一生のうち諸佛像

を十萬體彫刻し諸國に奉納せんご念願を發せりこれに因て其像みな鹿抹に荒びたれご甚古雅にして凡作にあらず故に世の人は是を賞せり圓空は天台宗三井寺派の大徳にして澗州河尻の彌勒寺の開山也しよ市橋寛利著書にいへり

振甫山 蓬左舊記寛永四年といふ物に昔大明國より唐人三人渡り皆御當地に止まり妻子持ごなる壹人は元寶といふ云云壹人は振甫といふ良醫なり山を下されしがしんぼ山とて東にあり醫も代々上手にて今に跡あり云云壹人はさふみやといふ耳醫者のよし子孫榮へたるか不知云云ごしるせりさふみやは平尾氏を稱し其末葉今に在り人の意と呼ばへり其地は福と申す其地は福と申す其地は福と申す其地は福と申すなれば尾張の文字を切ごりさふやは平尾ごし振甫は張氏を稱せりごもに子孫ありひごり元寶のみ舊號陳氏を稱しけるが皇國の神意に叶はさる故にや其子至極の愚者にて用ひられず子孫斷絶せしなり

兒島屋敷跡 稻葉村にあり邑南の川の北涯を云中古兒島二郎太郎徳貞の宅地也徳貞は三河國梅ヶ坪の城主三宅次郎五郎高次の孫也高次の子息三宅左近丞徳次水藤四年より當地に居住す是則徳貞の父也



女まなり且又當村熊野社は兒島備後守高德入道應安の頃建立せしよし市橋氏著書に見えたり

川村城墟 川村の東にあり明和五年戊子其山を堀割て水を防く故今は牛毛村の地となりしよし市橋氏著書にいへり城主は墟尻に水野右京進川村の城主として時名芳しかりしと云云と云ふよし尾張人物志にも水野右京進西春日井村に見えたり

志段味小僧 志段味村長昌山久峯寺海覺和尚の弟子に滿瑞首座といふ大力の僧あり享保年間當寺再建の時凡五六人或は七八人して釣るべき程の大材木を後の山より寺内まで一人して悉く持運び又門前に立たる石牌の四五人して昇べき程なるを一人して軽々堂前まで運びしとぞ後紀伊の熊野に住しと云ふしが其終る處を知らざるよし市橋氏の著書に見え尾陽雜記にも志段見小僧とて出家にかくれなき大力ありしと云ふなり

一雨院日潤聖人詠歌

日潤聖人詠歌

池田よりうつ、にかゝるごころにて日くれぬ闇なれば路のちまた

もわかずからうじてうつゝにいたる

杉ひはらしける山路の夢かこよみれはうつゝのふもごなりけり

玉野 水野川東門瀧のあたり所々に玉石を産す谷水の底に夜る光曜ある

石あり尋ねざりて割れば中玲瓏として水晶よりも美なり其石鶏卵の如く上は黄色を帯へり最奇とすべし此處玉野といひ玉の川と稱する地は恐らくはいにしへよりかゝる玉石を産する故ならむかこ市橋氏の著書に考へいへり

玉野川入尾渡しより川平邊迄奇岩及び川の小石

○太鼓岩右

長持岩左

○鶏石左

○狸々瓶右

○獅子岩中

二福神岩右

○亀岩左

サモトガ淵

クヅレ岩左

炮録岩右

象ノ鼻岩左

獅子ケ瀨

高岩右

セバトガ淵

○羽衣岩右

ツチフマズ左

ナノリ岩左

○メノウ谷左

水神橋左

○三ツ岩中

屏風岩左

明神岩左

女夫岩右

捨子岩中

○飛岩左

○傘松左

小屏風岩左

座禪岩右

○観岩左

○三ツ岩中

ハサミ岩左

蓬萊岩山上

天狗岩山上

狸々岩右

橋ケ瀨

ハント石左

蜂屋大岩山上

石ケ洞左

鏡子口左

鏡子口左

間ノ瀬

猿飛岩者

關所ケ洞原五

甲岩中

棧敷岩原五

○蛇ケ洞原五

ヒサシ岩原五

東門ケ瀧

中津山郡村ノ東門ケ瀧山ノ東に在る一石

眼鼻岩

野田川ノ中流にあり

石橋

口大ノ石橋にあり

龍淵 屏風瀧

に美原村

目赤籠 玉野川にあり三四月頃所々川にてさる長二三寸大なるは五六寸のものあり目赤く鱗黄にして黒き斑紋あり腹中卵多し鮎の卵より大きく味甚美也元祿の頃まで里民これをとりて毎年献上せしを近來止みたるよし市橋氏著書にいへり中島郡海東郡邊にて櫻はえご呼べる魚と  
同物なり

山椒 定光寺山にあるを名産とす慶安年中藤原正虎朝臣但馬國朝倉村より寄せ此山中にうゑられしが土地に相應せしにや繁茂し且風味の辛烈なる他産にまされり刺も又すくなし其後其種子を國中に傳へて所々に培養すこいへとも皆定光寺山椒と稱して賞美するよし市橋氏著書に  
しるせり延喜典藥寮式諸國進年料雜藥尾張國四十六種のうちに蜀椒二

斗五升八合とあり尾張産の古來より多かりし事をしるべし

鷹巢山 雲興寺の北にありて毘沙門山ともいふ瑞龍賢君の御代此山に鷹の巢をかくる事あり有司に命じて捕らせ給ひしとぞ今此邊水野山にて佐志婁雀鶴雀鷹大鷹早鶴等數種の渡り鷹を捕る事はあれど巢をくふは希也たま／＼巢かくるものは魚鷹へ鷹等のみ水野邊にて鷹をさる事は古來よりありて水野氏所藏の弘安四年の古證狀に見えたるよし市橋氏著書にいへり

明智光秀居地跡 明智村にあり其所今定かならず凡明智氏は美濃國土岐郡明智村の住士にて其地名を名乗れる事三代也土岐頼康以來尾張美濃兩國の守護を兼國務を沙汰せし事度々ありて其一族董津氏蜂屋氏等當國に住めりされば明智氏も兩國の明智村を主維してこゝにすみし物なるべし明智光秀居地跡見聞軍抄三浦理心の幾多二右衛門と云尾張半人の小者一若こいふごうり取の尾張の子也が下郡に及びなき望みをかけていろ／＼評論しけるよしいへる條に天正十年六月二日の事かごま明智日向守光秀は前右大臣平朝臣信長公三位中将信忠卿父子を討て後天下の主さなる此人もごは尾州春日部郡あけち村の百姓也云云としるせり

山猫 水野村土人云山中に猫あり大さ小熊の如し村民甚恐るされども出る事稀也たま／＼これを見れば必病ひすと云依て山の神也と言傳へて其形状を見定めたる者なし其邊又野猫あり是皆山猫の子なりと市橋氏著書に見えたり

立石 中水野村路傍にあり此石も小金山の洞にありし慶長名古屋御城御營案の時石墨の用に御引かせ有しが役夫是まで曳來りしに此石俄に重りて更に動かざりし故定めて小金山觀世音の惜しみ給ふならむと衆議極まり其儘棄置しとぞ屹立として東海道佐夜中山の子鳴石の如くなりしが寶曆年中洪水の時土に埋没してのちわづかに残れるよし市橋氏の著書に見えたり

少林山新徳寺 同村にあり臨濟宗京都妙心寺に屬す元龜三年の創建にてさまで古刹ならねど二代の住僧荆洲和尚は大坂の長臣大野修理亮か一族にて智僧なりければ諸人の歸依深く此邊の寺院多く兼帶支配す國祖君御鷹狩の節は當寺に御行厨を召上られ住僧荆洲へ拜領物なご下し給ひしとぞ

### 葉栗郡

山内但馬守盛豊 上郡織田家之臣也父は山内日向守藤原盛通と云丹波國の住人父子尾州に來り黒田に在城す盛通は連歌の作者萬里詩集に委しカニ見たり

曾根村一本松 田面黒田街道際にあり曾根の一本松とて名高し枝のふりよく高からずひくからずして佳木なりウキカキあり

青木異足 さいふ光明寺村光明寺の禪門也ある時秀吉公異足が墨色を見て吉凶をしめす事妙也と神君に御物語ありければ神君則御書判を見せ給ふ異足手を打て後には神に祭られ給ふ瑞ありと申すいかにご問はせ給ふに御判を逆にすれば鳥居の形あり御實名を御改め然るへしと言上す則家康と御諱を奉りしかは元康を改めてしか名乗給へり異足か子孫今幽なる百姓にて他郷にあり青木と稱するよしカニいへり

伊勢田 張州志畧に北方村田二十石之地耕獲而爲米十斛五斗奉皇大神宮稱伊勢田伊奈備前守忠次彦坂九兵衛光正云云連署券書藏神宮祠官老沼長太夫家と見え

勸五郎火 橋爪村の邊雨天の夜なご出る妖火也すてに名所圖會に大關和

尙が頰文にて其火や、うすらしよしよしるし置つれど其頰詩のみをあ  
げて序文をもらしつれば其意定かに聞えず故に其序文をこゝにしるす  
運善寺 大日比野村にあり淨土眞宗京都東本願寺の直末なり法輪集に尾  
張國羽栗郡日比野村運善寺古天台宗也宗祖聖人歸洛時岩倉より當所に  
招請し開法して弟子と成云云と見えたり

丹羽郡

天武天皇御陵 二宮村にあり君山著書の二宮の條に天武天皇陵在本社西  
北此地不可有天皇陵想天武天皇朱鳥三年建諸祠故以祀之歎とせる  
り是則擬陵にして熱田の白鳥陵の例に同じ白鳥は和銅年中の營築なれ  
ばこゝなる擬陵も其頃きづきたる物なるへし當天智天皇の御世の末天  
武天皇の御始め頃の尾張守は少子部連鉏鉤なりされば其頃鉏鉤心をつ  
くして多くの屬社を營建せし事もいぢるくいつの頃にか此陵の地より  
出たりし古瓦一箇を神主家に所藏す其さま甚古雅にして尾張守の文字  
ありまさしく尾張守の古體文字にて鉏鉤のいごなみたりし殿字の瓦の  
破れて地中に埋もれ居たりし物なるべし其さまかくの如し  
萬祥山常福寺 二之宮村にあり臨濟宗當郡樂田村永泉寺の末寺なり往古  
の開基詳かならず天正六年梶川彌三郎高盛再興し龍首座を開祖とすは  
じめ龍林庵といひしを天明四年今の山號寺號に改む本堂木尊準胝觀世  
普樂師堂鎖守社等境内にあり  
成澤 今井村にあり成澤山は村の良の方に遠からず成澤川は郷中を流れ  
て入鹿の池に入る凡此あたりは尾張富士の裾にて甲斐國富士の北うら

古瓦の圖

大徳寺入形  
大徳寺に盡く  
向  
圖  
裏  
に  
お  
り

の成澤村の地勢によく合へり又入鹿池の外宮村に丸山池瀧ヶ河池角ヶ  
河池割河池成澤池禰宜河池熊池宮河池落河池物置河池あり富士村に  
辨才天池金山池北之河池ありて是を富士の三池と稱す何れも山の裾に  
して水いささよく小湖の如し彼甲斐國富士の根廻りに山中大湖をはじ  
め本栖湖精進湖等の八湖その外小湖多く散在したるに勢無として符合  
せり是皆往古より天工自然の地勢にして人工の作爲する所にあらず大  
小の異はあれど駿尾一對の如し成澤は駿河の富士の名所にて古歌にて  
よめる雅地なるか此尾張富士の麓に備はりたるも一奇事といふへし  
鳴澤 富士山の北の麓に鳴澤村あり甲斐國都留郡のうち南のはてなり國  
圖にあり成澤村高六十四石の小村也歌によむ富士の鳴澤こゝ也  
○袖中抄にふしのなるさはこは富士の山の峯に池の如くに大なる澤あ  
り其水と火と相尅して煙と水氣と相和して立のぼる火もえ水のわき  
かへる音常にぞすさればなるさはこ申と云云是を或人ふしのなるさ  
とよまれたり云云

佛頭石 今井村及び三河の猿投山にあるよし近江の石亭木繁が著したる  
に見えたり玉髓のたくひにて形佛頭の螺髪（うづり）の如しされども今は

出る事希なり

今枝四郎左衛門尉 今井村の人其居地今定かならず今井村舊は今枝とこか  
きて廣く犬山の庄内なりしとぞ季理日録に寛正五甲申十一月十四日林  
光院領尾張國犬山庄今枝方公事不用御奉書就于南御所可嘆申之由企  
無謂之由懇々披露之仍以寺奉行松田丹後守并齋藤四郎右衛門殿被命  
于寺家也廿七日林光院領今枝四郎左衛門尉所申被任理運仍可被成御  
奉書之由被仰付于齋藤四郎右衛門尉也林光院徐岡和尚擲還御奉書之  
罪重披露之仍殿被仰付也同六乙酉六月廿五日林光院領今枝四郎左衛  
門尉所申重伺之齋藤四郎右衛門尉令披露之と見えたり四郎左衛門い  
かなる人か知りがたけれと徐岡和尚が訴訟の公事に負ずして勝たりし  
を見れば威權の強かりし事ははかり知られたり加賀侯の長臣今枝氏及  
び織田信雄公の従士今枝彌八等の先祖の一族が何れにも歴々の武家に  
て此地に在りし人なるへし

虫不食菜畑 禪師野村にあり

かやの木古木 塔之地村にあり弘法大師の古跡と里民いひ傳へたり

織鹿尾觀音勸進の事 名所圖會にくはしくしるし置つるを猶少しく附録

すすぐれたる靈佛にて伽藍廢壞等の時は室町殿御世話ありて義教公義政公など奉加の御判を下されしこそ季理日録に長祿四庚辰七月十九日尾州犬山蓮臺寺本尊靈佛觀音之伽藍也依廢壞而勸進之御奉加之御判普廣院殿有之奉懸于御目爲本證文被遊也と見えたり

稲陀落山大泉寺 栗栖村にあり臨濟宗京都妙心寺の末寺也應永十五年相模國足柄郡大雄山最乗寺二世無極大和尚の開基にて曹洞宗なりしか衰廢に及びしにや天文十一年先照瑞初和尚中興して臨濟派に改めしよし寺傳にいへり境内鎮守社御影の裏書に文安三年丙寅七月廿五日と見えたり境地甚廣く無垢清淨古雅なる山寺なり天文の頃木曾川向ふの猿塚のち山の城主田原左衛門尉は當寺の住職の親族にてしたしみ厚く常に當寺に來遊せしが或時田原氏の類多治見修理謀叛を起し田原氏が當寺遊びし處に乘じ兵を催し合戦して城を乘取り左衛門尉を追い退けしこそ安土創業錄に永祿六年八月信長小牧山より犬山を経て木曾川一類多治見修理と云者あり田原左衛門の名代として土岐美濃守へ出仕す云云田原左衛門が祖母は尾州丹羽郡栗村大泉寺にあり毎年正月四日

田原大泉寺に行きければ多治見其期を待謀叛して猿塚の城を取り左衛門をたてだしけり田原此城に十七年在城しけるごかや多治見も是より十八年在城す信長今猿塚に寄せ城中内應の者有ければ城は則落てけり多治見修理城を忍び出て甲州へ落行武田信玄へ仕へけるごぞこしるせり

歌仙橋 羽黒村のうち丑寅の方にありて幼川に掛る桃青庵の發句あり俳諧師の宗匠を歌のひじりご心得てかく呼びそめやかて橋の名ごなりしごぞ

をりくは伊吹も見えて冬籠

はせ茂

太一 大見大明神社 羽黒村にありて生土神とす境地甚廣く山林叢鬱ごして頗る大社めきたり社號も又古雅なり天正十二年の兵亂に記録散失して御鐵座の年月神傳等定かならず正保四年十二月十八日社人宮地藤右衛門が記録に往古社領莫太にして社人七家社僧神子等も多く田島を領し年中に七祭を修し八月八日熱田の神事に當社の社人相越し神輿の供奉を勤め來りしが六十五ヶ年以前天正十二年の兵亂より社領其外諸事衰滅せしよししるせり本社祭神六座天照大神、天孫大神、天津彦彦火瓊瓊杵尊、天智山命、其外渡殿

拜殿透垣高塀のみな瓦葺なり

例祭二月五日新暦三月五日 六月晦日旧暦九月五日 三神神樂部文七郎重出子其外皆藤子白根三郎方野馬

十一月五日新暦

末社 醫王神社 愛宕神社 比良賀天神社等境内にあり

茶臼山の麓

茶臼山 諸國に多し何れも古戰場大将の陣場をさしていふ諸軍を引廻すといふ儀也とぞ○三河設樂郡長篠の川上村の茶臼山は織田信長公の本陣なり○尾張丹羽郡樂田村の茶臼山は豊臣秀吉公の本陣也

盲目棍原 正事記に羽黒村の中程に棍原城屋敷といふ地あり二三十年以前堀元正の頃堀原か末孫とて盲目の有しをめぐり棍原といひしは是にて跡絶て今はなし郷人とも主君の筋目也とて馳走してあかめけるこそ此めくら棍原まで重代の重寶有けるよし中にも日蓮上人御自筆の法華經一部有りしを愚親正事記の作も拜見せられ侍りしうすやうに似たる紙にて一巻のふごさ一寸廻りも有らむ長六七寸文字は一分四厘よりもまだちいさからんごの物語也又するすみの櫻今にあり姥櫻也昔棍原讒を構へ義經公に高館にて御腹めさける時御首鎌倉に登り頼朝公御實檢あるに義經の御口の中に一巻の書あり含狀是なり其時棍原か讒言顯は

れ頼朝公の御憎みを蒙り身の置所なくして名馬摺墨に乗て此羽黒まで遊來る馬は長途につかれ死けるを爰に埋てしるしに標を植置きける由申傳ふごしるせり堀元正の頃堀原か末孫とて盲目の有しをめぐり棍原といひしは是にて跡絶て今はなし郷人とも主君の筋目也とて馳走してあかめけるこそ此めくら棍原まで重代の重寶有けるよし中にも日蓮上人御自筆の法華經一部有りしを愚親も拜見せられ侍りしうすやうに似たる紙にて一巻のふごさ一寸廻りも有らむ長六七寸文字は一分四厘よりもまだちいさからんごの物語也又するすみの櫻今にあり姥櫻也昔棍原讒を構へ義經公に高館にて御腹めさける時御首鎌倉に登り頼朝公御實檢あるに義經の御口の中に一巻の書あり含狀是なり其時棍原か讒言顯は

傘松 樂田村永泉寺の門前にありて東西二本たてり信長公鷹野道遙の時俄に大雨降出しかは此松の下に雨やざりし給ひしより公自ら傘松と名

來番場何某が住たりし跡也と里人いひつたへたり世俗の淨瑠璃狂言などに秩父か耶等榛澤六郎棍原か家來番場中太と善悪一對にもてはやされたるをかしき男なれど武編においては名高きはほまれもありしなるべし

つけ給ひしよし水泉寺の傳記にしるせり秦始皇の故事に符合していでたき古松なり

寛政七年 坂井の井 かき松の月 は柄もりの 詠めかな 福州兵衛延平

坂井右近政尙 樂田村の人名所圖會にもせ置つれど今暫く増補す凡坂井氏一族廣く數代當國武衛の守護代として清須の城を守れり攝津守大膳亮長助等みな名譽の人々なり其外同氏の人八郡のうち所々に居て功勞を盡す右近は其うち格別の勇士なり織田軍記の元龜元年十一月近江の堅田合戦の條に坂井右近將監政尙は今年の夏姉川の戦に先陣を仰付られけれども追崩されたる事を深く恥入り此度は是非拔群の忠を盡し討死せんご心懸しが同廿五日の夜ひそかに堅田浦につく儲も堅田は淺井朝倉が兵糧を支度し寺内を城郭とし籠り居けるを其夜右近が人數一同に押寄せ寺内を破却し淺井朝倉か兩手の人數四五十人討取り殘兵を四方へ追ちらし其まゝ寺内へ入替る淺井備前守名代云云翌廿六日のいまた重雲も明けやらぬに堅田の寺へ押寄る云云城大將坂井右近目代織田甲斐守殿信長公の御目代として御立見たり比類なき勳して終に討死し給ふ此外坂井十助云云ひたご討死すごしるし織田家譜の堅田合戦の條に

も信長使坂井右近赴焉朝倉淺井使大兵攻右近右近戦死云云と見えたり二子山古塚 曾本村にあり小高き岡にて古墳の地ごも見えす村内の者の草刈場また子供などの遊び場なりしか嘉永二酉年三月十日村の者土をさるごて大石に堀あたりたり蓋石二枚をさり除けられはうちに龍頭の兜轡等の武器あり地蔵の木像も一體ありまさしく歴々の武將の墓なるべしごて其まゝ小牧の縣令に訴へければ小吏來りて是を改めやがて官裁ありて武器をもこの如く納めふた石土を盛げて舊貫に復しけるごそ地蔵尊は當村本曾寺官に請ふてもちひ得たり此邊りにさるべき大將なごの居住ありしごも聞えずいかなる人の墳墓か今は知りがたし三四百年以前岩倉の城主織田氏上四郡を主維し威權ありし其代々のうち誰人かの墓あごなるへし本曾寺は丹羽山ご號し曹洞宗御供所村桂林寺の末寺元和五年南榮和尙の再建なり

井上古城 井上村にあり尾州古城志及び君山先生著書に井上城は嘉吉年中重松主水正といふ人居住せしよししるせり二宮の神主重松氏の一族かもし然らば本姓尾張氏の舊家の武家にて重松左衛門尉尾張俊村の近親なるべし俊村中島郡のうちに多く私領ありし事名古屋大須所蔵の寛



元三年乙巳十二月十八日の古文書に見えたり

兩乞の井 井上村にありて城井戸と呼べり干魃の時此井戸に兩乞をいのり水を流らへきよむれば必雨ふらずといふ事なし希代の名井なり當村井出神社に御手洗跡ありて文化頃までは清水湧出せしが近年埋れしよし里人いへり井上庄井上村なごの稱は此井戸及び御手洗の清泉より起れり

古城趾 八御村にあり今は畠となり古塚一つ残れり七面の社を勧請す里人天正年中織田信雄卿の居城といひつたへたり

鈴木三郎重家屋敷跡 神野村にありて其地を古屋敷と稱す又其あたりに古墓跡ありて常磐御前井に鈴木三郎の奥方の墓跡なりご里人いひつたへたり倍又村の南の方なる王子塚と呼べるは鈴木三郎の墓所といひ當村熊野權現社阿彌陀堂等もみな鈴木三郎の建立勸請也といへり今按するに古書に所見なき説なれど又ゆるよしなきにあらず鈴木木本性種積朝臣也此近きあたりに種積の舊郷もあれば其氏人住居せしかも計りかたし鈴木もご紀伊國熊野の人なれば其御神をこゝに勧請せし事も有るへし旁捨がたき傳説にやもし實説とせば前件彼王子塚恐らくは種積皇子

の御墓跡なるべし大須所藏の正應元年十月十一日製葵王丸千手五郎か連署の狀に謹請申種積御庄公文職間事云云と見えたり

圓通山稻原寺 石佛村にあり曹洞宗小折村久昌寺の末寺なり本尊は自然石體三尺八寸の觀世音にて村名の起れる所の靈像也後土御門院の明應六年五月廿三日より村中震動して田畠叢林も傾壞せんごす他村は平穩にて當村のみの地震なれば村民恐怖戰慄に堪たり同二十八日村の西なる水付の田地裂分れて地中より石體の觀世音光明を放ちて湧出し給へりかくて震動も止みければ村民感涙を垂れ恭禮し奉り官廳に訴へ一字の草堂を營み彼尊像を安置し稻原庵と名づけ曹洞宗の僧宗益といへるを請して住持とす元祿七年九月十三日圓通山稻原寺と改號當村もご稻原村といひしが此觀音安置ののちいつごなく石佛村とよひならひしよし寺傳にいへりの傳は此觀音大佛の傳と異なり

藥師堂 石佛村のうち長安組にあり往古長安寺といへる天台宗の梵刹なりしか廢絶せしを天和三年五月再興す鯛口一口銘に尾州丹羽郡井上庄石佛村長安寺藥師鯛口奉寄進當村地頭名護屋住源朝臣大田半右衛門尉治良寛文二年拾二月吉日云云とあり

岩倉炬燵 乘穩録に尾張にて火のなきことつを岩倉こたつといふ昔岩倉殿さよべる人貧しくしてこたつに火なく海蝦ウミエビを煮たる燵カマドを入れ置たりしよりかくはいふ也と江戸にては板倉こたつといふ是も同じさまに云傳ふ岩倉板倉相近し何れが是なる事を知らずとせしるせり當城主織田氏代々岩倉ごのと稱しかご世に貧窮の沙汰なし

妙見堂 岩倉村にあり三十番神鬼子母神を安置す境内法塔は往古よりありしよしいひ傳へ塔内に文明年作の小石妙塔を納め置けりいこく古雅なる物なり

今宮牛頭天王社 岩倉村上市場にあり天正十四年の勸請にて古社とも稱しがたければ今宮と呼べり境内甚廣く末社白山社三十番神堂等あり山内氏居住地 岩倉村にあり豊前守敏直ははじめ曹洞の禪僧なりしか壯年より武衛家に仕へ登庸せられ右兵衛佐義敏の諱の一字を授かりて敏直と名のり豊前守と稱すのち岩倉城主織田大和守敏定に従ひ此地にありしこそ

山内豊前守敏直壽像今世馬場安之守 萬里和尚  
今識豊前司傳祿 昔譜洞下有君臣 白鬚撫得數壺雪 子子孫孫億萬春

靈藥保童散

岩倉村山川氏これを製す小兒疳の虫の名藥なり享保のころ旅僧一人此家に来り一夜のやどりを頼みければ語して宿せしむ其夜家内の小兒疳虫に苦み既に危急に及びしに旅僧これを哀み我に妙藥あり旅泊の恩謝に授くべしとて其藥法をしめし與へぬ則調合して服せしめけるに忽快氣し無病の身となり八十餘歳の壽をたもてり其後此法藥を疳虫ある小兒に與ふるに本復せざる者なし此家日蓮宗の信者なりければ彼旅泊の靈僧は定めて祖師上人の化現なるべしと其頃評しけるこそ天明の頃より施藥とし其のち妙法靈藥保童散と名つけて賣藥とす

熱田大神宮社

岩倉羽根村にあり所の氏神として本社拜殿等嚴重なり境内に神明社天王社八劍宮社源大夫社八幡社天滿宮社等あり例祭八月十九日九月十六日

傳法寺廢跡

傳法寺村にあり往古傳法律寺といふ大塚寺打大梵刹ありし故其地を傳法寺村と呼べり其寺廢毀して年久し應永元年天鷹禪師其舊墟に一禪刹を建立して正眼寺と名づく其境内及び堂閣等こくく丹羽郡の地なりされども西の方に隣れる中島郡下津の城主の旦那なるゆゑ寺は彼城下に屬して世に下津の正眼寺と呼へり寺内甚廣く十八町四面

ありしとぞ元祿二年正眼寺を春井郡三淵村にうつして此地二たび廢跡  
となる悲く田圃となり今猶語録橋五輪潭などいふ古跡の残れるは昔時の  
おもかげなるよし君山先生の著書に見えたり有用圖書には五六種なるの書取つれど著  
録本なるべし今按するに當時の城主は文正記に

根上りの松 五日市場村の北なる田圃にあり其根の形甚奇にして普通の  
さまにあらざりたはらに小社をいごなみ 神を祭れり

外崎瓜 君山先生著書に瓜出外崎村比較於諸邑所產稻大味美俗呼曰外  
崎瓜と見えたり甜瓜は上條瓜に類し越瓜白瓜等は珠にすぐれたり糟漬  
壺漬等によし越瓜を壺に淹し日にはしたるを雷ぼしといふ又二ツに割  
てなごを去り壺を塗て日に乾かす味よく船の形、の如し後水尾院の御  
句に

ほし瓜や壺の干かたの捨小ぶね

賤き者の食物をいつのまに見ざり給ひてかかゝる句を作り給ひけんい  
ごよく形容し給へり

齒守薬師 淺野村にあり齒守山東福寺と稱し淨土宗にて同村常保寺の末  
寺なり薬師如來は弘法大師一刀三禮の彫刻御丈二尺餘の木像なり靈驗

すくれていちぢるく祈願をこむる時はいかなる難病にても治せずとい  
ふ事なし首は開眼し聾は聰耳となる牙齒を守り給ふ事はもごよりの御  
誓願にてもろくの齒のやまひをいやし給ひもし脱落する時深く祈念  
し奉れば其齒再生するのたくひ殊勝の奇瑞おはしますよし畧縁起に見  
えたり

林彌七郎故居 淺野村にあり異本信長記に岩倉の城方に淺野村住人林彌  
七郎とて隠れ無き弓取有り云云永祿元年五月廿八日浮野合戦橋木一巴  
か鉋玉に中り佐藤藤八に首をとられたり云々こしるせり

神明社 淺野羽根村にあり生土神とす六所明神社天王社等あり例祭六月  
十六日八月十七日神寶古鏡五面太刀二振箭の根七筋あり又延寶六年野  
狐の書たる證文一通あり

豆塚 馬見塚村にあり此塚の事名所圖會に馬見家馬身塚等の説をあげ置  
きつれご今又再考してこれを増補す山城國愛宕郡御泥池の側なる豆塚  
と同様の古跡にて疫病除の塚なるべし壺尻に洛外御泥池の良隅に豆塚  
と云あり傳へ云寛平の御時京師疫癘流行せしに神託の事有りて斯地に  
貴船の神を祀れり除夜に土人神輿を昇て此地を廻り其後炒豆を升到盛

りて四方に撒し餘豆及び升を土中に埋み其所を豆塚と呼びしと云云  
見え雍州府志にも全く同様にしてせる如く此馬見塚村にも貴船明神の  
祠中古より貴船の神祇なりしありてよく符合すむかし一宮にて疫除の祭事を  
行ひて里人明神の神祇なりしありてよく符合すむかし一宮にて疫除の祭事を  
行ひ其炒豆を此地に埋みしかも計りがたしまごまごは其語轉し安  
ければかと思ひよりてしるすのみ實に然るや否や後人考へ定むべし  
鶯の池 浮野村にありむかしは大池なりしが埋もれて今は篠原少しのこ  
れりいと風雅なる池の名なれといかなる故にてかく名づけしか今は知  
りがたしと里人いへり案ずるに大むかし鶴沼川高野川等の分流此邊よ  
り中島郡へかけて流れたりしがいつの代にか其瀬替り果て今は川筋の  
姿も見えずされども其舊流の溢れ水等の餘波にや有りけん四五百年以  
前は一宮妙興寺等の左右前後數里が程濠地の水沼なりしとぞ臥雲日件  
録に妙興寺の開山禪師工夫才覺をめぐらし其廣き沼地を陸ごなししよ  
ししるしたれば定めて其頃此あたり水湿地も埋もれ陸ごなりしなるべ  
し凡駿河の浮島が原をはじめ諸國ごも浮島浮田など呼ぶ地は必濠水沼  
池等を築立たる所の通稱なれば此村もさる故もて浮野ご名づけし物な  
るべし猶郡邑に南北の小淵村定水寺村なんご水に縁ある村名の多かる

もさる故かこ押はかられたり偕その埋め残りたる池をも浮洲の池ごよ  
び來りしを後世訛りてうくひすの池ごいひならひし物かも計りがたし  
孝婦さよ 丹羽村の農夫の娘なり幼少にして父に離れ母壹人の手にて成  
長せしかば其思を厚く報ぜんとおもひ立て生涯孝養を盡せり壯年の頃  
舞養子をすむる人ありといへども母え孝養の薄らがん事をいこひて  
諾せず父にはなれしちも段々困窮し僅か壹斗五升目の田地を母より貰  
ひ受て耕作し晝夜生綿織を勤み且骨折業をもいごはず辛苦かんなんし  
て孝養す貧窮の中より暑氣寒邪に胃されざるやうに厚く手當し片時も  
側を離れず撫さすり食物なごも其好みに叶ふ物を朝夕すむ其叮嚀な  
る事言語に堪たりかくする事數十年を経て退屈せず嘉永四年さよ五  
十七歳母りよ九十歳に及び其孝心の精實公聽に達し五月十四日農御  
役所へさよをめして御褒美ごして青銅二十貫文及び母老養扶持一人分  
一生の内下し給ぬか、る御仁恵に預り奉る事さよ母子の歎ひのみなら  
ず村里の者の面目也ご乍恐上を仰ぎ奉れり當丹羽村には丹羽 とい  
ふ儒學者ありて父祖より三四代其業を繼ぎ儒學詩文等に通達せり村う  
ちの者必其儒教を學ぶごしもなければごか、る孝義の賤婦も出來たりし



は只御治世の御光澤なるべし

光明山瑞仁寺 熊代村にあり浮土眞宗京都東本願寺の直末なりはじめ法

光坊といひて天台宗勝栗村削栗社の社僧五坊法光坊にて法西坊の社僧ありと法光坊にて法東坊の社僧ありと法光坊にて法南坊の社僧ありと法光坊にて法北坊の社僧ありと

洛の節五坊各御弟子と成りて改宗す専光坊法光坊は則其魁首たり數代

の後天正 年顯如上人教如上人信長公と合戦の時五坊の輩門徒を引つ

れ早速大坂石山の城へ馳せのばり御味方申しかば上人歡ひ給ひ厚く褒

賞し給ひしごぞ故ありて中世しばらく浮野村にうつり寛永六年法光坊

を改めて今の山號寺號とす其のち元祿年中舊居今の地へうつりしよし

寺傳にいへり前時五坊のうち東光坊は今勝栗村にて法光寺と稱す法光坊は今の浮土村瑞仁寺に猶名

所圖會にのせたる勝栗村徳法寺の條と合せ見るべし

五坊御光澤  
教にあり  
は之の三  
方諸門人  
人うち寄  
勝にひかへ  
原に顯

△五坊大坂表(出陣)圖



萩村の邊諸村平原の地に自生の物多く陸奥の宮城野にも劣らじと見ゆ  
初秋花の頃は名古屋よりや、遠ければ見に來る人すくなし惜むべし里

人刈りて葬し又茶室の壇垣の料に諸方にうる實に郡中の名産なるよし君山著書にいへりはぎは秋花の魁首にて萬葉集秋七草の歌にもはぎの花をはなくず花初第一初についてたり尤賞すべき雅草也

金剛山龍光寺 佐野村にあり天台宗野田村密藏院の末寺なり最初開基の年月定かならず寛文六年木性坊いふ僧再興す境内甚廣し木曾十一面觀世音御丈五尺餘の立像也其外諸佛の木像を多く安置す境内に藥師堂地藏堂天道宮牛頭天王社等あり二俣老松一樹境内にあり高廿五間餘巡り一丈六尺餘あり希代の大樹幾百年を経たりしか考へ知りかたし

固榮山全久寺 北小淵村にあり曹洞宗下津正眼寺の末寺也開基建立の年月定かならず境内境外の除地甚廣く鎮守八劍宮秋葉堂白山宮瘡神宮等あり瘡神の本地佛藥師如來の立像は聖德太子御作と寺傳にいへり珍敷神號江戸の瘡守稻荷など同例の神社にや

長福廢寺跡 加納馬場村にあり其地廣く六尺程の石二ツあり又其邊にて布目の古瓦を掘出す事あり何れにもいかめしき古刹の廢跡なるべけれど古書に所見なければいかなる寺院なりしとも今は知りかたし因云當村に三本木墓大山墓などよべる古塚何れも地廣く又孤塚とよべる大塚

ありむかしより老狐住めり里民いへりもし加納氏の人々の古墓の跡ならずや右氏は此地本貫の武家にて一宮なごにも移住せしごぞ蜷川親元日記の寛正六年の條に八月十日尾州山田蜷川出雲守在莊也九月二日蜷川出雲守申御被官人事御對面始也加納修理一進長能尾州一宮加納長野住人守護不入所也と見えたり室町殿の被官人にて守護武衛家のまゝにもならずりしよし也猶長能中島郡長野村をも知行せし人なるべし

柳橋郷地御 小折村を古來より柳橋郷と稱するよし君山著書にしるし神風抄に尾張國楊橋御厨御厨一十卷と見えたり小折は後世の名なるべし津田正生が尾張地名考には小折村の邊の諸村蠶養のために桑を多くうゑて枝を折り用ゆこをりは則桑折より起りたる村名にて奥州道中のことをり宿を桑折と書く同例なりされは和名類聚抄に丹羽郡大桑とあるも此地なるべしと考へいへり正生が桑折の説はさもあるべし大桑の舊郷とせむはいかゞしくうけがたかるべし

内大臣信雄公誕生の地 小折村生駒氏の第宅則是なり君山先生著書に小

折村の八龍權現社は信雄公の生土神のよししるせりて此所國子會にむく大龍王祀りし公は

牛洗川 時之島村にあり往古仙人牛を洗ひたりし古跡也。里人いひ傳たり今は川なく只田圃の字にのみ残り按するに時之島の古城主を日根野法印大内定次といふ人もしこいひ傳へたればもし其法印を仙人なりとあやまりかくいひつたへしか或は安良とのなとの古跡にはあらずや猶考べし

時島古城跡 時之島村にあり日根野法印居住せしと里老いひつたへしよし君山先生著書にいへり日根野は美濃國の勇士なり左京亮其子織部正等はすぐれたる良士にて片縣郡正木村に居宅の跡あり此法印はそれら一族なるべし

晴雲山日觀寺 瀬部村にあり日蓮宗京都妙滿寺の末寺なり寶永年中阿部

伊勢守正寛營建

本略に見

奈良砦の跡 上奈良村北西の方にありて今は松林となれり其邊畑の字に丸堀あり田の字に堀田あり皆其古跡なり太閤記家忠日記等に天正十二年八月秀吉公十六萬騎の着到にて二宮山にのほり上奈良より五郎丸邊に陣し翌日より上奈良村河田村大野村河田大野は三箇所に要害の普請初まり九月下旬大方出來せしかば城主を定め兵糧以下の沙汰ありしよし

るし豊饗には四月末つかた犬山の未申なる奈良高田ふたつの村に城を構へ羽柴長谷川藤五郎稻葉右京を置て守らせ七月朔日の程にや秀吉六萬計りの勢をこまき野青塚邊へ打いだしだん／＼に軍の備へをして二重堀のかりの要害を引拂云云と見え豊臣家譜にも秀吉搦城於奈良高田使長谷川藤五郎秀一稻葉右京亮貞通守之とありて大野村の事見えず且河田村を高田とさきあやまれり

春日大明神社 下奈良村にありて生土神とす例祭八月十四日修行す此御神御鎮座あるゆゑ村名をかく呼び初めしか又は奈良の地名によりて春日の神を勧請したる物か今は知りがたし中尾義稻が説に和名類聚抄に丹羽郡上春とあるはこなるべしと春日の郷といひしを上中下三村にわかれし後日文字を省き上春の二字をかみかすがとよみ來りし物ならんかすべて郡郷の名を二字と定まりしのは諸國ともに畧字の村名郡名おほく當國の春日郡も日文字を略して春部とさきやはりかすがべとよみたりしと例なりといへり其可否は知らねどいご面白き考へなり

丹波屋敷の跡 安良村にあり里人前田丹波の屋敷跡といひつたへたり按

するに前田は苗字にあらず字前田前畑とよぶ地ありてそこにある古跡  
故かく呼びならへり全く地名也むかし丹波何某丹波郡名といふ人  
丹羽郡のうちを主維して此地に在りし跡なるべし四五百年以來亂世打  
續き海内みな合戦を事ことす其うちに武をのがれて連歌茶事等に遊ぶ歴  
々の人諸國に多しそは皆形を異風にもてなし道服を着し頭を裏み牛馬  
等のにりてうそぶきありく宗祇宗長牡丹花因果居士相摸の福島伊賀守  
の如き是なり此丹波何某もかゝるたくひの異人にて丹波殿あるひは安  
良殿とも稱しなるべし當村力長村等の八月廿九日の神祭にぬり笠かふ  
りたる異様の人形をのせたる曲鎌馬を出す是を安良の二物と名づけ里  
人神功皇后の粧ひなりといひつたへたりされども婦人の容にあらず若  
此丹波何某の異粧にて馬あるひは牛なごにのりてうそぶきありきしを  
うつし傳へし物にあらずや西の方時之島村に牛洗川の跡といふありて  
里人の説にむかし仙人の牛を洗ひし古跡也といひつたへしも此人の事  
かと思ひ合はされたり安良とのといふ人の事はつれ／＼草に大納言法  
印のめしつかひし乙鶴丸やすら殿といふものを知て常に行通じに或時  
出て歸來たるを法印いづくへ行つるぞと問しかば安良ごの、かりまか

りて候といふ其やすら殿は男か法師か又ごはれて袖かき合せていか  
、候らん頭をば見候はずご答申きなごか頭ばかりの見えきりけんご見  
えたり

天満宮社 北野村にあり生土神とす此社ある故村名起るか又村名により  
て勸請せし物か今は知りかたし例祭正月廿五日八月廿五日

砂場觀音堂 宮後村にあり如意輪觀世音當國三十三所の第廿九番也櫻山  
觀音堂同村にあり千手觀世音當國三十三所の第卅番ごにも靈佛なり

森野解由 前野村の人織田信雄公につかへて武功多し天正十二年三月三  
日清須城中にして信雄公の命を奉し淺井田宮丸を誅伐す則其實として  
中島郡刈安賀の城を賜はり移住す其後豊臣家に仕へ慶長五年の亂に關  
東に從ひ奉り九月十五日關ヶ原において戦死のよし君山先生著書に  
しるせり是則豊後の佐伯侯の先祖なり 任村のてん功あり九郎小次郎は信に信國に  
無に與へたり

鯉魚 石枕村の沼池に産すむかし瑞龍賢君に献りしかは其美味を賞し給  
ひしより名物となりしよし君山先生著書にいへり凡鯉は川魚の最上  
にして海魚の鯛に比せり故に俳諧師等の雅人は櫻鯛紅葉鯉と對稱せり當





の頃清須城主の旗下にて此地に在りしなるべし謂て此の地に又古蹟ありて其地なるべし又近村余野村の氏神は神明宮といへる古蹟ありしはしる人謂く其地をよかへて八幡宮といへる古蹟ありしはしる人謂く其地をよかへて二社相並ひてたりともにも勸請の年月定かならず神明は文祿五年八幡は慶長二年ともに中島左兵衛尉といふ人の再建也境内廣く末社多し例祭八月廿一日鰯口二口あり銘に慶長二丁酉正月申嶋佐兵衛尉と見えたり

寺澤増彦太夫屋敷跡 下野村にあり切支丹之者屋敷跡同村にあり山林十二丁二反五畝歩字寺光亂法二ヶ所ありみな邪宗によしある地名なり寺澤も又切支丹に縁ある苗字なるべし信當御國にて切支丹を多く御成敗ありしは二百年許り以前の事也且當郡葉栗郡に彼邪徒の多かりしは編年大略に寛文五年二月切支丹故丹羽郡葉栗郡知行所替御代官所に成る同七年十月切支丹徒率擄斬罪二千人斗り云云としるし小笠原長昌覺書には寛文四年十二月十九日吉利支丹斬罪被仰付云云是四年以來之吉利支丹召人共今度御成敗男女二百人餘云云と見えたり

鷓飼町 大山の城西三光寺山の下にあり  
糟漬結 大山の名産にて毎年歳暮に成瀬家より關東へ献上あり正事記に

城下の岐組川に鮎の時分こゝの鷓飼鷓を遣ふ事岐阜の鷓遣ひより上手にて一人して鷓を十三羽つゝ遣ふ也いづれの國にてもかやうに鷓を多く遣ふ者はなきよししるの所かしきり外式のみならず引て并せり

犬山打刀劔 名所圖會にのせ置きつる其のこりを補ふ君山先生著書に鍛治數家造刀劔就中稱秀辰兼種家久自廣者特佳とせり犬山俚語記といふ物に攝津守自廣は俗名高木清太夫といひしか今は斷絶して跡なし百餘年のむかしある幸ひ人美濃國より出て此地に來り自廣清太夫に便りて犬山侯に仕ん事を望まれける二ヶ月ばかり自廣が宅に逗留ありてすでに召抱らるべかりしか事ならずしてやみにけり其後彼人江戸に下り莫太なる幸ひを曳出し終に十五萬石を拜領し永世の諸侯となられよししるせり

犬山 玉海集追加に戌の年の大晦に

犬山はけにをはりなりさしのくれ

吉秀 西條野兵衛

大木町 犬山町の西の方にありむかし大木院といふ禪刹ありしがいつの頃にか廢絶して地名にのみ残れる物なるへし或人考へいへり今常滿寺専念寺とて淨土宗の二院あるは其舊地なるべしなる引續き置きたる事なきは其の文

に全をたれけりしては事あたはし事  
に全をたれけりしては事あたはし事

尾之飯頼山下大木禪院則大安之附庸而風浪渺茫難隔大川一  
葉可航而已成冬末大化老人自携鉢鉢而視築籬袖一篇以表江

湖瓢笠之質云

萬里和尙

氣宇天然一段水住持今日唱宗乘 飯山已遇詩中仙 大木寧非惠足僧  
受用松聲蓋午鉢 安排藥味炷烏藤 江湖白髮十年友 薄暮床頭未曲肱  
今按るに飯頼山は城地の三光寺山を唐の杜甫が故事に見立て飯山已遇  
詩中仙と作りしなるべし同じ無盡藏に貫河植安一曰欲觀飯山櫻井之山北尾

聞へたり後の雅人猶考ふべし

木馬 犬山針綱神社の神馬は木馬にて織田白巖居士の自作にて天文六丙

年八月寄附のよし社傳にいへり白巖は織田白次郎重山にて天文十六

加藤清正 尾陽雜記彼清正は大織冠の末にて加藤因幡守藤原清信孫也清  
信は犬山に住みて齋藤山城守旗下也山城と信長犬山にて一戦の時清信  
討死を遂る其子鬼若とて二歳なりしがやうくひにひさなり尾州愛知  
郡中村といふ所にて光陰を送る後に彈正右衛門某と號す彈正卅八歳に

して死す其子虎之助中村にありしが秀吉の母尼と虎之助の母いごこな  
りし縁により秀吉に仕へて武勇並ひなく唐土迄も名を揚鬼しやくはん  
といはれし也

名酒山吹 犬山練屋町越後屋平右衛門といふ酒造家に山吹といふ銘酒を

醸す日野の資枝公に奉りければ御歌を給ふ

尾州犬山住市橋何某のかもする酒を屋萬富喜と名つけたるを  
汲てしもつきぬなさけの名にしおふ此山吹の花はめつらし

從一位資枝

ごあり

織田興十郎廣近 小口村の城主名所圖會にのせ置つれご其傳を盡さず依

て再びこれをあく廣近は織田邦廣中興の二男にて兵庫助敏廣武衛一  
つからるの弟也廣近武勇拔群にして文正の大亂動といふに勳功を盡せり抑

尾張の守護斯波武衛に三人の家老あり織田兵庫助敏廣尾張の守護代として在  
朝倉彈正左衛門教景武衛の守護代として在甲斐美濃守常治在甲斐といふ各家家

なり寛正の末に武衛千代徳丸義建早世ありて嗣子なし此時甲斐常治室  
町殿の執權伊勢守貞親と相談して大野右兵衛佐義敏を武衛の家督とす

朝倉教景是を不可として義敏に服せず主従不和なる教景方便をめぐらし終に義敏を筑紫に追ひ退け澁川治部太輔義廉をむかへて武衛家を相續せしむかくて義敏は武衛家を取かへさんごはかり義廉は其義を防がむとす伊勢貞親は義敏に荷擔し山名宗全は義廉に與力し其外の諸大名わかれて左右方に附したがふこれに依て文正の騷亂京都の合戦さし起れり此時織田氏ひごり尾張遠江兩國を守り居て甲斐朝倉等が私曲奸計に加はずさいへごも京都の注進櫛の齒を引が如く刺へ其處に乗じて半人あぶれ者までさわぎ立て尾張の國うちも穩やかならず兵庫助敏廣は遠江に居たりしが此躁動を静めんごて文正元年七月遠江を出て尾張に歸り自身は尾張にござまりて國中の狼藉を静め舍弟與十郎廣近に數千の軍兵指添上洛なさしむ廣近猛勢を引卒して馳のほり京都においてしはく合戦利を得たり室町殿をはじめ歴々がたの扱ひにて終に義敏義廉和議ごのひぬ所傳の手ぬはかりなりしと稱すかくて其御禮ごして義廉十月四日室町殿へ出仕ありければ織田與十郎甲斐左京亮朝倉孫次郎騎馬にて警固供奉し其行粧美々しかりしよし文正記に見えたり義正記文ごがしに於て長祿寛正記並仁科等數十部のみならず此騷亂治まりてのち與十郎歸國し遠江

國をもおさめしゆ糸遠江守ごも名のれり其のち廣近常城關六小坂の城なり稱すに移り犬山の城をも兼帯し永享十一年より享徳三年まで十六年の間城を保ちて威權聲譽あり延徳三年廣近卒去法名を珍謀常實庵主ごいふ位牌は同村吉祥山妙徳寺にあり

織田遠江守廣近 余野村徳林寺に位牌ありて前遠州刺史木住院殿珍謀常實大禪定門延徳三年九月廿四日卒織田遠江守廣近公者郷廣公之仲子也ご徳林寺の書上に見えたり

此書刊行二百部  
第九十三號



A294



昭和八年十月二十日印刷  
昭和八年十月二十日發行  
編輯者 三島 隆  
印刷所 三島 隆  
發行所 三島 隆  
總發行所 三島 隆  
印刷部 三島 隆  
製版部 三島 隆  
裝訂部 三島 隆  
刷部 三島 隆  
印刷部 三島 隆  
製版部 三島 隆  
裝訂部 三島 隆  
刷部 三島 隆

愛知 県



1103263716

294

才

1A-3-G